ISSN 2432-2849

Nagoya University Institute of International Education & Exchange

International Language Center
Annual Report　Vol. 7

名古屋大学国際機構　国際言語センター　年報　第7号

2020

名古屋大学国際機構

国際言語センター
年　報

第7号

目 次

巻頭言 ……木下　徹　1

実践報告
・上級レベルにおけるニュースの情報伝達型授業 ……石川　公子　5
・NUPACE 日本語2における口頭自己表現活動について……許　明子・宗林由佳　8
・NUPACE 日本語5レベルにおける読解表現の実践報告……許　明子・香川由紀子　14

活動報告
・FD 活動の報告 ……俵山　雄司　21
・第80期・第81期（2019年度）日本語研修コース ……佐藤　弘毅　23
・第38期　上級日本語特別コース（2018年10月～2019年9月）……永澤　済　26
・全学向け日本語プログラム　2019年度 ……俵山　雄司　28
・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」 ……浮葉　正親　30
・短期留学生日本語プログラム　2019年度 ……石﨑　俊子　33
・第20期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース ……李　澤熊　35
・オンライン日本語コースの運営 ……石﨑俊子・佐藤弘毅　38
・名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2019年度実施報告 ……許　明子　39

資料 ……43

巻頭言

国際言語センター長２年目に際して

国際言語センター長

木　下　　徹

2019年の４月から国際言語センター長を務めさせていただいております木下と申します。大室前センター長と同様に，本学大学院人文学研究科に所属しております。

昨年度も紹介させていただきましたように，本センターの淵源としては，多年，本学の留学生教育や日本語教育を担当してきた留学生センターが重要なことは言うまでもありませんが，現在の，本学組織上の位置づけという点からは，2005年に策定された「名古屋大学国際化推進プラン」，さらに，翌2006年４月に設置された「名古屋大学国際交流協力推進本部」に遡ることも可能かと思われます。その上で，本学の国際交流を目指す種々の組織改革を経て，現在では，本センターは，大学本部の「国際機構」という組織の下部組織の一部として位置しています。国際機構は，(1) 本学をハブ大学とする AC21という国際的な大学間ネットワークや，本学に関係した海外での危機管理に関する業務を含む「国際連携企画センター」，(2) 全ての授業を英語のみで行う Global 30 International Program（通称 G30）を含む「国際プログラム部門」，「国際交流部門」「アドバイジング部門」からなる国際教育交流センター，そして，「日本語･日本文化教育部門」と「英語教育部門」の２部門を擁する，当「国際言語センター」から構成されています。（英語教育部門については先述した G30部門を兼務する教員から構成されていることもあり，本稿では言及せず，別な機会に譲りたいと思います。）

本センターの役割としては，教育面では，留学生センター時代と同様，日本文化に関する諸々を含む広い意味での日本語教育があり，研究面では，本学大学院人文学研究科の応用日本語分野として，そのカバーする諸領域を受け持っています。その他，大学内の組織改編に伴う新組織の構想等もあります。

さて，進行するグローバル化に伴い，ここ数年，ゆるやかに増加してきた名古屋大学の留学生数は，調査時期や，「留学生」の定義による関連資料間のある程度の違いはあるとしても，『名古屋大学2020プロフィール』によれば，2019年度の実績が，私費，国費，外国政府派遣を合わせて2696名でした。これは，同資料の一昨年度実績である2641名と比較して実数で55名，率では約１％増で，ほぼ横ばい状態です。

これは，もちろん，第一義的には，昨年度後半には，新型コロナウィルスのため，渡日する学生数も大きく影響を受けたということがあります。ただ，グローバル化の重要性は本学でも多くの方々が折にふれて提唱して来られましたが，このことは，実は，日本だけのことでなく，実際問題として，留学生獲得もまた，国際的な競争の波にさらされていると言われ，特に優秀な留学生をより多く招致できることは必ずしも容易ではないとも指摘されています。その懸念が，この数字を見ると，すでにある程度，現実の問題となる兆しが示されているといえるかもしれません。

本センターでは，このような留学生獲得競争に対応する一つの試みとして，専任の先生方を中心とした関係各位のご尽力で，2019年７月に，２週間内外と短期ですが，名古屋大学への本格的な留学を検討している人を対象として名大の魅力を知ってもらうことを意図した NUSTEP というプログラムを実施しました。（ただ，この企画はコロナのため，2020年２月予定分は中止になりました。）

NUSTEP の他，当センターの主要なプログラムの１つである NUPACE の中止も含めて，2019年度後半から始まったコロナの影響は，海外との学生の交流という点でも極めて大きな制約条件となっています。しかし，逆に言えば，その中でも渡日できない学生への対応や，日本語，日本文化に関するオンライン授業の実施など，本センターの果たしている役割は，質的にも量的にも，より高度化し複雑化してきています。一方，残念ながら，現在の人員は留学生センター時代からご尽力いただいた教員が2018年度末に転出された後，補

充されていません。コロナの影響もあり，国や本学の財政状況もますます厳しいといわれている中ではありますが，当センターに課せられた役割の重要性を考えるとき，マンパワーのひっ迫状況が一日も早く改善されることを願ってやみません。

実践報告

上級レベルにおけるニュースの情報伝達型授業

―NP8視聴解表現の実践報告―

石　川　公　子

１．はじめに

NP8視聴解表現は名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の上級レベルのクラスである。主として聴解力と口頭表現力の向上を目標に置き，さまざまなテレビ番組の視聴を通して発表や話し合いなどの表現活動を行った。2018年度の開講時から宗林先生と筆者の２名で担当し，１期15週30回の授業を８～９種類のテーマで設計した。

本稿では，2019年度後期に実施した授業内容のうち，ニュースの情報伝達型授業について報告する。この期の受講生は中国，イギリス，ノルウェーの３名であった。

情報伝達型授業とは，藤原・籾山（1997：137）によると，学習者がそれぞれ異なる記事を読み，その内容を他者に伝えるというインフォメーションギャップを利用した授業方法である。読解と口頭発表をリンクさせた上級向けの授業形態として知られている。本実践では，記事の代わりにニュース動画を使用し，ニュース視聴，関連資料の検索と読解，ハンドアウト作成，口頭発表（質疑応答）という流れで，４技能の統合を図っている。

２．情報伝達型授業の教材の選択要件

情報伝達型授業の読解教材の選択要件として，藤原・籾山（1997：69-72）では次のような点が挙げられている[i]。

①読みごたえのあるもの
②情報が新鮮であるもの
③論旨が明快であるもの
④事実と意見のバランスがほどよくとれているもの
⑤読後に考えをまとめやすいもの

視聴解教材では，このような要件に合った素材を受講生数分（ペアで行う場合でもその半数分）準備することは困難であったため，これまで情報伝達型の授業はあまり行われてこなかったようである。しかし，NHK NEWS WEBをはじめとする各メディアの動画サイトからニュース動画が手軽に視聴できるようになったことと，それをパソコン等に取り込むShowMoreなどの録画ソフトが容易に利用できるようになったことによって，ニュースの収集と保存が可能になり，視聴解においても情報伝達型の授業が可能となった。

本実践では，視聴解教材として，上述の①～⑤の要件のほかに次の３つの観点も加えた。

⑥１～３分程度の長さでまとめやすいもの
⑦現在の日本社会の理解に役立つもの
⑧アナウンサーによる事実報道だけではなく専門家や一般人のコメントも含まれているもの（④と類似しているが，アナウンサー以外の発話が含まれていることで，聞き取りにくさが増し，聴解のモーティベーションが高まるためである）

３．実践内容

3.1. 授業のねらい

授業のねらいとして次の５点を挙げ，受講生にも明示した。

①ニュースの視聴を通して聴解能力と要約能力を高めることができる。
②要約した内容を整理し簡潔にハンドアウトにまとめ，ニュースを視聴していない者にわかりやすく伝えることができる。
③ニュースでは報道されていない背景や原因，具体例，問題点，対策，報道後の最新の状況などの関連情報を調べて，ニュースの内容について理解を深めることができる。
④上述③について簡潔にハンドアウトにまとめ他者にわかりやすく伝えることができる。
⑤上述①と③について自分の意見を明確に述べることができる。

表１　受講生の選んだニュースと構成

受講生Ａ「海底にプラごみ」（2019.11.22,　１分14秒） １．ニュースの概要（1）海洋研究開発機構が８月から９月にかけて調査を行った結果 （2）台風15号の通過後、相模湾沖合約20キロの海面を調べた結果（3）土屋正史（海洋研究開発機構の海洋プラスチック動態研究グループリーダー代理）の話 ２．関連情報（1）海のプラスチックごみの問題点（2）海のプラスチェックの源（3）対策 ３．私見
受講生Ｂ「フェイクニュース対策検討」（2019.11.17,　１分６秒） １．ニュースの概要（1）フェイクニュースの影響（2）総務省の対策（3）情報管理についての問題 ２．フェイクニュースとは（1）フェイクニュース例（2）フェイクニュースの７つの分類 ３．フェイクニュースに関わる意識調査 ４．諸外国のフェイクニュース対策 ５．私見
受講生Ｃ「若者の斜視にスマホ影響か」（2019.6.18,　３分30秒） １．ニュースの概要（1）１日10時間以上スマホを使用した男子生徒（高２）が斜視になった例（2）斜視に関する眼科医の考え ２．関連情報（1）眼科医の意見（発表者によるインタビュー）（2）浜松医科大学、佐藤美保氏の意見（3）日本弱視斜視学会による斜視の種類 ３．私見

3.2.　ニュース教材

２で述べた８つの要件を踏まえ，2018年４月から2019年11月にかけてのNHK NEWS WEB動画から12のニュースを候補に選んだ[ii]。

3.3.　実施時期と授業の流れ

全30回の授業の後半の４コマを本実践に当てた（18回目，19回目，23回目，24回目）。それぞれの授業の流れは下記の通りである。

１コマ目（18回目，石川担当）：課題説明と発表例提示[iii]，ニュース選択と視聴

２コマ目（19回目，宗林先生担当）：発表準備（ニュース要約，関連情報を調べハンドアウト作成など）

３コマ目（23回目，宗林先生担当）：発表準備（ハンドアウトチェックと訂正・追加など）

４コマ目（24回目，石川担当）：発表（ニュースの概要紹介＋視聴→関連情報の説明→自分の意見発表→質疑応答，１人約20分）

3.4.　受講生の選んだニュースと発表の構成

受講生３名が選んだニュースと発表およびハンドアウトの構成と見出しを表１に示す。

４．実践後の気づき

4.1.　成果

・受講生３名の発表内容は，視聴したニュースだけでなく関連情報についても適切にまとめられており，構成もよく考えられていた。日本語の正確さについては文法や発音の面で訂正の必要な箇所はあったが，３名とも質の高い発表を行い，3.1で述べた５つのねらいは達成されたものと思われる。

・ニュースの視聴解だけに留まらず，関連情報を調べることによって発表者はニュース内容をより多角的に捉えることができた。聞き手となる他の受講生にとってもニュース内容に関する理解と関心を深めることにつながったと思われる。

4.2.　反省点

・この期の受講生達は構想を練ってしっかり準備するタイプであったので，授業外にかなりの時間を要したようであった。授業内の準備時間をもっととるようにするとよかったかもしれない。NPコースは，視聴解も読解も科目名に「表現」が付き，発表する機会が増えているが，他科目と情報交換し，受講生の発表準備の負担を軽減する配慮が必要であろう[iv]。

・発表では，3.3でも示したように，ニュースの概要を紹介した後，ニュースを視聴し映像で内容を確認するという時間をとったが，とくに視聴の必要のないものもあった。クラス全体でニュースを視聴する機会をとらない方が，インフォメーションギャップの意味も増し，情報を正しく伝達しなければならないという意識も高まるだろう。

4.3.　その他

・教材として使った１～３分程度のニュースは，受講

生自身で視聴し内容を整理するには適切な長さであり，また，ニュースで述べられていない関連情報を付け加える上でも適度な情報量であった。

・ShowMore を NP コース開講当初に石﨑先生から紹介していただいたおかげで，２で述べたような適切なニュースを日頃から録り貯めることができた。その結果，選択肢を増やすことができ，より関心を持てるニュース素材を受講生に提供することができた。

５．おわりに

NP8レベルは，残念ながら2019年度をもって閉講されることになった。が，ニュースの情報伝達型の授業は，受講生の日本語力やニーズに応じて工夫や調整をすれば，他レベルでの実施も可能である。上級レベルの受講生を対象にした本実践で一定の成果が見られたように，他レベルにおいても有用性が期待できるものと思われる。

注

i　藤原・籾山（1997：69-70）では，ほかに「表現が明晰である記事」，「視点に多様性のある記事群」という点も挙げられている。

ii　受講生に提示したニュースリストは参考資料に記載した。

iii　発表例として「小学校の先生は…人型ロボット！」（2018.6.8，２分30秒）を使用し，ニュース概要と関連情報をまとめたハンドアウトを提示し，教師がモデル発表を行った。

iv　2019年度前期のNP8視聴解表現でも同様のニュースの情報伝達型授業を行ったが，時間調整としてコース終盤期に追加したため，発表までの準備期間が限られていて，この期のような達成度は得られなかった。終盤期ということもあり発表疲れなども起因していたように思われる。

引用文献

藤原雅憲・籾山洋介編（1997）『上級日本語教育の方法』，凡人社，東京

参考資料（受講生に提示したニュースリスト）

１）ゲーム依存（19.11.27，１分53秒）
２）海底にプラごみ（19.11.22，１分14秒）
３）フェイクニュース対策検討（19.11.17，１分６秒）
４）ゲノム食品 販売可能に（19.9.19，１分31秒）
５）スーツ着用ルール見直し（19.9.2，１分10秒）
６）ＩＷＣを脱退 商業捕鯨再開へ（19.6.30，３分37秒）
７）コンビニ 24時間やめたら売り上げ減（19.6.26，５分44秒）
８）若者の斜視にスマホ影響か（19.6.18，３分30秒）
９）110番通報 約20％緊急対応必要としない（19.1.10，１分）
10）駅・電車で迷惑１位「荷物の持ち方・置き方」（19.1.5，１分７秒）
11）エスカレーターの安全な乗り方を呼びかけ（18.11.23，１分18秒）
12）土俵から下りて 緊急処置の女性にアナウンス（18.4.7，４分53秒）

NUPACE 日本語２における口頭自己表現活動について

許　　明子・宗林由佳

１．はじめに

本稿では NUPACE 日本語コース２（以下，NP２）における自己表現活動として実施した２つの口頭表現活動，Conversation Drill と最終ポスター発表について実践報告を行う。Conversation Drill は日本の日常生活におけるコミュニケーション活動の一環として４つの言語行動場面を想定して会話練習を行ったものであり，最終ポスター発表はグループワークとしてポスターを作製して自国の紹介を行ったものである。

２．NP ２コースの概要および口頭表現の概要

NP ２コースの概要は以下の通りである。

・授業時間：５コマ（90分／１コマ）／週＊15週
・授業の進め方:『NEJ』の各ユニット３～４コマ（各ユニットの学習以外に，３ユニットごとレビューの授業を設けた）
・各ユニットの進め方：１コマの授業で，各ユニットの１セッションを終了することを目指した。授業内では，新出語彙の確認，マスターテクストの理解，口頭練習，グループ活動によるやり取り，自己表現活動および発表，の順番に進めた。

各ユニットの進め方は，基本的には西口（2013：156）に提示されている NEJ の各ユニットの学習指導の基本的手順（図１）に基づいているが，副教材の活用等，本コースで独自に取り組んだ活動もある。

上記の学習指導の基本的手順に基づいて，当該コースでは図２で示した手順で進めた。（許2019：73）

図１と図２で示したように『NEJ』は自己表現活動としてエッセイの作成やエッセイ集の完成を最終ステップに設定している。NP ２コースでもエッセイの作成，フィードバック，リライトを行い，自己表現活動の一定の成果は見られた。

しかし，学習者からも日常生活における日本語の会話を学びたいという要望があるが，『NEJ』の内容に準拠すると口頭表現によるコミュニケーションズの練習は十分に行えない。そこで，日本の日常生活で日本人とコミュニケーションズを行う４つの会話場面を想定し，その場面に適切な会話を聞いたり，話したりする口頭表現活動を取り入れた。また，まとまりのある内容の口頭表現として学期末に同国の学習者同士でグ

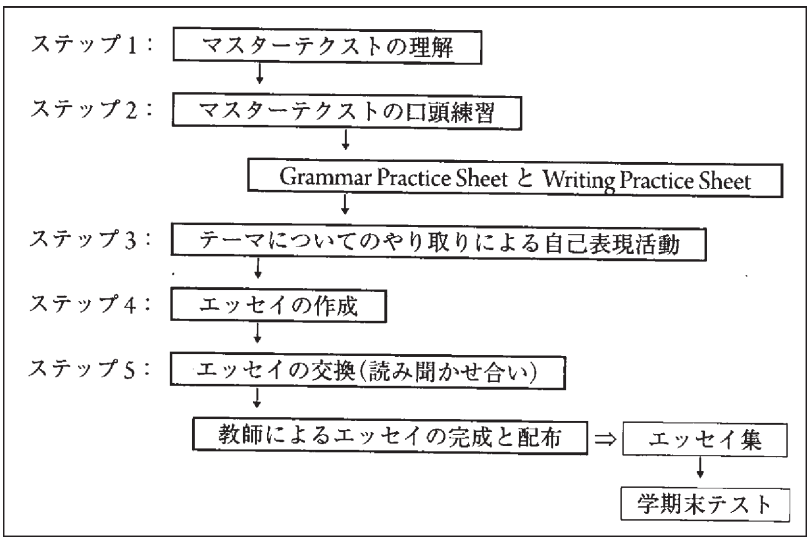


図１　NEJ の各ユニットの学習指導の基本的手順（西口2013：156より引用）

ステップ１：マスターテクストの理解
↓　新出語彙の確認（新出語彙 PPT）
Writing Practice Sheet
音声
ステップ２：マスターテクストの口頭練習
↓　新出語彙の確認（新出語彙 PPT）
ペア読み
グループ活動によるやり取り（紙芝居 PPT）
ステップ３：テーマについてのやり取りによる自己表現活動
↓　グループ活動による自己表現活動（紙芝居パウチカード）
Grammar Practice Sheet
Read Aloud（教師と学習者の対面による確認）
ステップ４：エッセイの作成
↓
ステップ５：エッセイのフィードバック
３ユニットごと、教師による間接フィードバック
学習者の自己訂正
リライト（エッセイ交換読み）

図２　NP２コースにおける学習指導の手順

ループを作って，ポスターを製作しプレゼンテーションを行った。

本稿ではコースで独自に導入した活動の中で，グループ活動を通して２つの口頭表現活動の詳細について報告する。一つは，会話の形式をとっている Conversation Drill であり，もう一つはまとまった談話の発表を行うプレゼンテーションである。次章で各活動の詳細について報告する。

３．口頭表現による自己表現活動

3.1　Conversation Drill

NP２コースの新しい試みとして会話運用能力を身につけることを目的とした活動，Conversation Drill が組み込まれた。本コースでは４回の Conversation Drill が設定され，１回は３コマ（90分×３）で進められた。

3.1.1　ねらい

日常生活のほとんどを大学のキャンパスで過ごす学生にとって，日本人学生との交流は不可欠であり，交流の支えとなるコミュニケーション能力を身につけ，人間関係を構築することは重要なことだと言える。Conversation Drill の大きな目標は 次の４点である。

① 日本人の友達と話す Casual style（普通体）と目上の人と話す Formal style（丁寧体）の会話を理解し，会話の相手や状況をふまえ，使い分けて話すことができる。

② 「会話を開始する」「話題を提示する」「会話を終了する」等の会話を構成する談話要素を理解し，使うことができる。

③ 談話の流れを意識して談話を組み立て，会話を作ることができる。

④ 時には会話の主導権を持ち，会話を維持しながら必要な情報を得ることができる。取り上げる言語行動場面は，大学キャンパスにおける学生と日本人のやりとりの中で学習者の積極的な働きかけが要求されるもの，「誘う」「許可を求める」「断る」「アドバイスを求める」の４つを選定した。

3.1.2　授業の流れ

Conversation Drill の授業の基本的な流れは次のよ

うである。

活動１　会話理解　モデル会話１（Formal style）の理解と練習
モデル会話２（Casual style）の理解と練習

活動２　会話作成　談話練習
ペア（２名又は３名）になり会話スクリプト作成

活動３　会話発表　会話場面撮影（録画）
発表（録画したものを見る）と振り返り

3.1.3　教材

モデル会話は，大学生活において特に学生が遭遇する状況を想定し，４つの言語行動場面でそれぞれ丁寧体と普通体の会話を作成した。初級の会話教育では主として丁寧体の会話が練習されることが多いが，学習者の持つ文法能力との照らし合わせをせず，あえて普通体の会話を教材として取り入れた。これは，学生との雑談で「日本人の友達から私の日本語が丁寧すぎると言われる」という話をよく聞かされたことからだ。学生にとって普通体の会話は負担が多くなると考えられるが，モデル会話のねらいは，話す相手によって会話のスタイルが異なることを理解し，学習者自らが会話スタイルを選ぶことができることである。モデル会話の役割は，一つのモデルとして提示するが，それを覚えることではなく，会話の流れがいくつかの談話で組み立てられていることを意識させることにある。談話を展開する談話要素の知識を得て，それを自在に使えることを重視した。各 Conversation Drill で取り上げた会話の内容は以下の通りである。

Conversation Drill １「誘う・うける」
会話１（丁寧体）先生をカラオケに誘う
会話２（普通体）友だちを昼ご飯に誘う

Conversation Drill ２「許可をもらう」
会話１（丁寧体）大学の健診があって，授業に遅れることを先生に話す
会話２（普通体）宿題を忘れて寮に取りに行きたい。友達の自転車を借りる

Conversation Drill ３「頼む・断る」
会話１（普通体）韓国料理を食べに行かないかと誘われるが，断る。相手はさらに誘ってくるが，理由を言って断る。
会話２（普通体）レポート作成中にPCが不具合になり，友達に貸してほしいと頼む。断られるが，図書館の PC が使えるとアドバイスをもらう。

Conversation Drill ４「アドバイスをもとめる」
会話１（普通体）友だちにお勧めの場所，食べ物を聞く
会話２（発表例）観光地について聞いたことを紹介する（スピーチ）

モデル会話の理解に重点が置かれるが，会話内容には次のような教育項目があげられる。

(1) 談話を構成する要素

★会話の切り出し
「あのう」
「あのう，ちょっとよろしいでしょうか」
「（名前）さん」
「あのさ，悪いんだけど」

★話題の提示
「たことある↑」（経験があるかどうか聞く）
「明日の授業のことなんですが」

誘う
「～んだけど（状況を説明する），行かない」
「～んだけど，いっしょにどう」「食べに行かない」
「あのう，よかったら…ませんか」「行こう。行こう」

頼む
「ちょっと教えてくれる」（直接）
「PC，借りられる」（直接）

許可をもとめる
「ちょっと使ってもいい」
「あのう，少し遅刻してもいいでしょうか」

許可求め→説明
「じつは，今から宿題を取りに寮まで行きたいんだ」
「じつは，ほけんセンターに行かなければならないんです」

理由を聞く
「忘れたの」「どうしたの」

相手に勧める
「…し…し」「鍋料理が有名なんです」

断る
「○○はあんまり…」「辛いのはちょっと苦手で…」
「今，お金がなくて…」（自分の状況を説明する）
「予定があって…」
「ごめん，わたしも今，使ってるから」

「今日はやめとく。これから友だちに会うから」
アドバイスをする
「図書館に行ってみたら」
感謝する
「ありがと。助かる」
★会話の終了
「楽しみにしています」「また今度誘ってください」
「ごめん，残念だけど」
「すみません，よろしくお願いします」
非言語行動（戸惑いを示す）
「ううん」（返事を保留にする）
（困った状態）ためいきをつく
(2) 話し言葉の特徴
・倒置
「ごめん，金曜日は約束があって」
・縮約形
「書かなきゃならない」「今使ってるから」「今日はやめとく」
・助詞の脱落
「行ったことある」「昼ご飯，食べた」
・省略
「あんまり」「漢字クイズがあって」

3.1.4　活動

具体的に活動の詳細を紹介する。

(1) 活動１（会話の理解・練習）

モデル会話の提示は，日本語の習熟状況等に合わせた提示の方法が見られた。授業の最初にモデル会話を読ませ，談話のつながり，展開を考えさせる方法と，逆にモデル会話は見せずに，場面状況を与え学生に会話のスクリプトを考えさせる方法だ。学生はどのように会話を進めればいいのか意見を出し合いながら会話を作っていく。教師はそれを聞き取りながら会話を板書していく。できあがったものとモデル会話を比較することから学生の気づきを促す方法だと言える。また，普通体の会話練習には聴解練習も取り入れた。「質問－応答」の短い談話を聞いて Yes/No を聞き分ける練習（２発話）や許可をもらう場面のやりとりを聞いて許可がもらえたか否かを聞く（４発話程度）練習を取り入れた。

(2) 活動２（会話作成）

学生はペア又はグループになり，会話のスクリプトを完成させる。会話の状況設定も学習者が行い，会話のストーリーを話し合う。ストーリーができあがると，A の発話，B の発話を相談しながら書いていく。どう言えばいいのか適当な表現を話し合う場面がある。教師は巡回し，学生の質問にヒントを与えたり適宜答えたりする。

この段階で学生の個性が発揮され，おもしろい会話のストーリーができあがる。

(3) 活動３（撮影と振り返り）

会話のスクリプトのチェックが終わった学生から会話の練習に入る。準備ができ次第ムービーカメラを持って出かける。（二つのグループが共に行動し互いの撮影をする）撮影場所は１階のロビーに行ったり，外のベンチを使ったりする学生もいる。階段で転んで友だちに助けてもらうという場面，看護師が医師に「休みをもらう」という場面設定で，教室が突然医局になったりもする。撮影時間は30分程度とし，教師はその時間は各グループの撮影補助をしたり，役者をもり立てる監督の役目を担ったりする。全員が戻ったら会話の振り返りを始める。

振り返りの時間は，恥ずかしいという気持ちを持ちながらクラスメートがどんな会話を作ったのか興味津々という様子だった。録画を嫌う学生もいたが，実際に撮影に入ると皆で楽しそうにやっている姿は印象的だった。

3.1.5　Conversation Drill「断る」の場合

日本人学生にゲストとして参加してもらった例がある。学生のグループ（３人～４人）に一人入り，会話のパートナーになってもらう。学生は準備した会話のスクリプトを見ながら会話を始める。できあがった会話を２人で読むわけではないから，日本人から予測もしない反応をもらうことがある。学生は日本人の発話を聞いて即時反応しなければならない。学生にとっては現実のコミュニケーションに最も近い練習となった。グループのメンバーはそのやりとりを聞いて，自分の会話展開を考えるヒントを得る。準備したスクリプトを使わずに即興で会話を作る学生も見られた。会話のパートナーとなる日本人学生には常に断るよう依頼してあったが，日本人が断る理由に四苦八苦している姿は学生にもその状況が伝わったのか，グループ活動は終始笑い声が絶えなかった。図３は Conversation Drill の活動に参加している学習者の様子である。

図３　Conversation Drill

図４　最終ポスター発表の様子

3.2　最終ポスター発表

口頭表現による自己表現活動の中でまとまった談話を聞き手に分かりやすく伝えることを目的として２回プレゼンテーションを実施した。１回目は中間テストの後，２回目は学期末テスト後に実施し，NP２コースのイベント的な位置づけとした。それによって，口頭練習を行うと共にクラスメートとのコミュニケーションの場として活用することができた。本節では，２回目のプレゼンテーションとして実施した最終ポスター発表について述べる。

最終ポスター発表はNP ２コースに参加している２つのクラスが合同で実施した。両クラスに参加している学習者の中で同国の学習者がチームとなり，自分の国について紹介する。『NEJ』ユニット24の「言語・地理・気候」を学んでいることから，そこで学んだ語彙や表現を活用しながら，まとまった内容の談話を聞き手が分かるようにプレゼンテーションすることが狙いである。

発表の流れとしては，自分の国についてテーマを決めて，ポスターを作製し，クラスメートや日本人の友人（チューター）に説明し，質疑応答を行うというものであった。2019年度秋学期にNP ２コースを受講した学習者の最終発表ポスターの様子は図４の通りである。

４．おわりに

本実践報告では『NEJ』を主教材として運営した日本語コースで会話力やコミュニケーション能力を向上させるために取り入れた口頭表現について紹介した。図２で示したように，学期を通してユニットごとエッセイの作成による自己表現活動は行われていたが，日常生活の会話を学ぶ機会は十分に設けることができなかった。そこで，会話レベルのコミュニケーションとまとまった内容のプレゼンテーションの２種類の口頭表現活動を取り入れて実践を行った。

Conversation Drillの活動は，能動的な活動で学生たちの積極的な参加を得ることができた。その結果，次のような効果が期待できる。

(1) 学習者同士，日本人学生とのやりとりを通して，これまで自信がなく，「何をどうやって話せばいいかわからない」「恥ずかしい」と考えていた学生の日本

語が通じなかったらという不安や恐れを克服する機会となった。失敗してもいいという気持ちが持てるようになったようだ。

(2) 会話の振り返り（録画したものを視聴）で互いにコメントする活動では，映像を見ながら良かった点を全員で考え，意見を出し合った。会話の優劣を決めるのではなく良かった点を考えることで次回の活動につなげることができた。また自分の言語行動を客観的に見る機会となった。

(3) 会話の動画を作ることで，非言語行動にも着目することができた。

(4) 自分たちで会話スクリプトを考え，実際に演じるというパフォーマンスが，限りなく現実に近い会話となった。繰り返すうちに積極性が生まれ，各自の達成感を確認できる活動となった。

最終ポスター発表ではポスターの作製過程で学習者同士のコミュニケーションが活発になると同時に，クラスメートと助け合いながらプレゼンテーションに取り組んでいた。ペアワーク，グループワークを通して学習者間の学び合いの様子が見られた点は口頭表現活動の大きな成果であると言える。

学期末に行われた授業評価アンケートの結果によると学生からの評価は高く，グループ活動によるアクティブラーニングが日本語の口頭能力の向上に貢献したものと思われる。今後はエッセイとコミュニケーション活動の両面からのアウトプット活動を取り入れたコース運営を継続したい。

参考文献

西口光一(2012a)『A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE』VOL.1，VOL.2，くろしお出版

西口光一(2012b)『A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE テーマで学ぶ基礎日本語指導参考書』くろしお出版

西口光一(2013)『第二言語教育におけるバフチン的視点』くろしお出版

許明子(2020)「自己表現活動を取り入れた学習指導の有効性について―初級後半レベルにおける授受表現及び受身表現のエッセイの分析を通して―」『名古屋大学日本語日本文化論集』第27号．69-84

NUPACE 日本語５レベルにおける読解表現の実践報告

―読解力とアウトプット能力の向上を目指したピア・ラーニングの実践―

許　　明子・香川由紀子

１．はじめに

本稿では2019年度秋学期に実施したNUPACE日本語５レベル（以下，NP５）における読解表現の実践報告を行う。NP ５の読解表現コースは週２コマをセットで受講することになっており，インプットを通して「読む力」を育成すると同時に，アウトプットを意識して「表現する力」を育成することを目的としている。

いわゆる「読解」クラスでは読む力を伸ばすというインプットの活動に重点が置かれがちであるが，本実践ではアウトプット能力も同時に身に付けることを目指してピア・ラーニングの学習法を取り入れた。本実践報告では，学期初めに実施した読解表現に関する学習者の認識，アウトプット能力を向上させるために行ったピア・ラーニングの活動について報告する。

２．授業開始時の読解に対する学習者の認識に関するインタビュー

池田・舘岡（2007）では日本語教育におけるピア・リーディングの有効性と実践について述べているが，読解授業の問題点として２つの観点を取り上げている。一つ目は，「読む」活動が「外から見えない」特徴があり，学習の過程と成果が可視化されにくいこと，二つ目は，読みのプロセスではなく読んで理解した結果を扱うため，答え合わせのようになり教師が授業を進行することになりがちなことである。以上の問題は日本語教育の読解授業においても認識されるようになり，教室環境における読解授業の改善に向けていろいろな実践が試みられるようになっている。

NP ５読解表現の実践にあたって，本授業を履修する学習者の問題点を明らかにすること，また学習者が読解の授業に対してどのような認識をもっているかを知ることを目的として，授業開始時にインタビューを行った。インタビューは，前もって実施したアンケートの回答をもとに，第１回と第２回の授業終了後，ひとり５分程度行った。読解への認識に関する質問は，①今まで「読解」をどのように勉強してきたか，②読解の能力を伸ばす方法は何だと思うか，③「読解」とアウトプット能力はどのような関係があると思うか，④「読解」の授業で伸ばしたいスキルは何か，の４つである。また「この授業に望むこと」を自由に書く欄を加えた。回答とインタビュー結果から，学習者の読解の授業に対する認識を以下のようにまとめることができる。

(1) インプット能力向上への偏向

これまで受講者は，主に「教材（テキスト）を読み，内容理解の問題を解き，解説を聞く」という方法で授業を受けている。新聞や小説など多種の読み物を読む，スキャニングや音読を行う等，テキストや方法に多少のバリエーションはあるものの，進め方としてはインプット中心である。またこの経験からか，受講者のほとんどが，読解の能力を伸ばす方法は「いろいろなテキストを読んで，漢字や文法を勉強する」ことだと答えている。つまり，読解とはインプットの積み重ねであると認識していることがわかった。

(2) 読解とアウトプットとの関係に対する認識の薄さ

受講者が経験してきた授業の中でのアウトプットは，読後に自分の意見を言う，話し合う程度の活動に留まっている。インプット重視の授業に慣れている受講者が，読解におけるアウトプットの必要性を意識していないことは，③の問いに対して，３人が無回答または「わからない」と答えていることからも窺えた。またその他の答えも「よく読めたらよく書けるようになる」「インプットしないとアウトプットできない」など漠然としたものから「読解力を伸ばせば語彙力も上がるのでコミュニケーションがとれるようになる」「読解をすれば漢字が書けるようになる」「読んで理解して意見を発表する」など具体的なものまで，アウトプットにはインプットが必須だという考えはあっても，両

者を相互的に読解能力の向上につなげるという意識はないことがわかった。

(3) スキルアップの認識

アウトプットを学びたいという日本語学習者は多い。自習だけではカバーできないため，授業で学ぶ機会を望んでいる。インタビューでも，④の問いに「２つの文を読み比べて意見を話したい」「自分の考えを説明できるようになりたい」と答えた受講者がいるほか，「漢字」，「文法」，「内容理解」と答えた受講者も，このアンケートとインタビュー自体がきっかけとなって，この授業に望むこととして「話し方を学びたい」「アウトプットの能力を上げる方法を学びたい」と答えていた。

授業の開始の時点で，読解力を伸ばすだけでなく，流暢に話したい，作文も上手に書けるようになりたいという意欲は見られた。しかし，それが読解の授業とどのようにつながっているかを意識している様子はほぼ見られなかった。学習者がインプットとアウトプットの関連を意識して学習し，読解の授業を通して四技能（読む，書く，話す，聞く）が向上することを目指して，以下のように授業を行った。

３．授業目標とシラバス

「読解表現」の目標は以下の４つであり，学習者にも初日のオリエンテーションで説明し共有している。

①説明文，意見文，論証文などを読み，筆者の意見やその根拠を理解し，その内容を短くまとめることができる。（120字程度 ）

②説明文，意見文，論証文などを読み，その内容をわかりやすくクラスメートに説明することができる。

③文章からの情報，インタビュー，調査の結果を引用 （quote） しながら，わかりやすい構成の作文を書くことができる。(400字程度)

④文章からの情報，インタビュー，調査の結果を引用しながら，わかりやすい発表をすることができる。

様々なジャンルの文を読んで内容を理解すること，読んだ内容の質問に対して答えられること，要約文が書けること，クラスメートに説明ができること，アンケート調査の結果をまとめて発表ができることを目的としている。つまり，読む力を身に付けると同時に，書く力，話す力，聞く力も身に付けることを目指している。それらの表現力の向上がアウトプット能力の向上につながり，中級レベルに必要な四技能の向上につながることを学習者に意識させるようにした。

読み物として取り上げた内容は基本的には2018年度の内容を引き継いでいるが，学習者のニーズに合わせて以下の７つのトピックに絞って取り上げた。読み物のジャンルは多様で，説明文や意見文，インタビューの対話文等の様々な内容が含まれている。

(1) 米の輸入問題
(2) 少子高齢化
(3) 死刑制度廃止論
(4) 夫婦別姓制度
(5) 何かを選択すればゴールに近づく
(6) 遺伝子調査
(7) コミュニケーションの日本語

１つの読み物に対して４回授業を実施した。授業の進め方は教室活動と課題の提出を組み合わせ，①読み物の内容理解と確認（音読，小テスト）➡②読み物の応用と作文（グループディスカッション，作文）➡③作文のフィードバック（グループディスカッション）➡④書き直しと発表（作文，会話）の流れで進め，毎回の授業でピア活動，グループ活動を取り入れた。また，各活動に対して評価基準を示した後，学習者自身が自己評価を行い，授業目標の達成をチェックしながら進められるようにした。2019年度秋学期のシラバスの一部を表１で示す。

４．クラスにおけるピア活動およびグループ活動

本章では本実践で取り入れたピア活動，グループ活動として「音読」と「グループ発表」を取り上げる。NP ５の読解表現の授業では常にペアワークかグループワークを通してインタラクションを取り入れて進めた。各活動の評価も自己評価とグループ評価，教師による評価の３段階で実施している。各活動はスマートフォンによる録音，もしくはビデオカメラによる録画を行い，学習課程を可視化するとともに学習後の振り返りにも利用した。

表１　2019年度秋学期のシラバスの一部

回	日時	授業内容	課題
2	10月７日（月）	米の輸入問題－２ 音読，自己評価，グループ活動（グループシート），全体発表 応用，原稿用紙の使い方，ルーブリック	◆少子高齢化（小テスト，音読，予習シート）
3	10月11日（金）	少子高齢化－１ 小テスト，音読，自己評価，グループ活動(グループシート)，全体発表	●米の輸入問題（ゆにゅうもんだい）
4	10月18日（金）	米の輸入問題－３ 作文ピアフィードバック・書き直し	
5	10月21日（月）	少子高齢化－２ 応用１（話す），応用２（書く）の準備	★米の輸入問題◇少子高齢化（応用１） ◆死刑制度(小テスト，音読，予習シート)
6	10月25日（金）	死刑制度廃止論－１ 小テスト，音読，自己評価，グループ活動(グループシート)，	●少子高齢化
7	10月28日（月）	少子高齢化－３ 作文ピアフィードバック・書き直し	
8	11月１日（金）	死刑制度廃止論－２ グループ内で意見発表，グループシートの全体発表，	◇死刑制度（応用１）
9	11月８日（金）	死刑制度廃止論－３ 応用１（話す），応用２（書く）準備	★少子高齢化 ◆夫婦別姓制度（小テスト，音読，予習シート）
10	11月９日（土） 月曜振替	夫婦別姓制度－１ 小テスト，音読，自己評価，グループ活動，全体発表	●死刑制度（しけいせいど）
11	11月11日（月）	死刑制度廃止論－４ 作文ピアフィードバック・書き直し	

●作文（1st ドラフト）提出、★作文（2nd ドラフト）提出
◆教材をもらって予習、◇次回の授業（応用）の準備

(1) 音読

４名で１グループになって，本文の音読を行う。音読をする際に本文の内容理解をすると同時に，新出語彙の意味確認，発音の練習を行う。一人３行～４行程度ずつ分担して順番に音読を行うが，意味の切れ目でポーズを入れて間違いがなく流暢に読むことを意識して数回練習を行う。練習が終わったら，グループ内の代表がスマートフォンで録音し，音読終了後に録音ファイルを聞きながら自己評価を行う。

音読の評価は，まず事前に配布したルーブリック評価基準に従って，録音したファイルを聞きながら自己評価を行う。録音したファイルと自己評価表を教師に提出し，教師による音読の評価は次の授業でフィードバックを行う。自己評価と教師の評価を比較しながら学習者自身のモニターができるようになり，学習の過程を可視化することができるようになる。

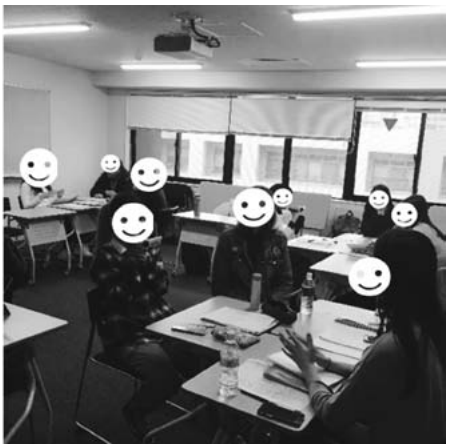
音読活動は，声を出して本文を読むこと，音読を録音して自己評価を行うことによってアウトプットを意識するようになった点で有効であった。意味の切れ目が分かるように読むことを意識して音読を行った結果，聞き手に分かりやすく話すことや，流暢さも意識するようになった。

前章で述べたように，学習者は読解能力を向上させるためには色々なテキストを読んで内容を理解し，問題を解くという認識を持っていたが，音読を行うことによってアウトプットを意識するようになり，読解の授業に対する認識が変わったと思われる。

(2) グループ発表

各トピックの４回目の授業でテキストの応用活動として作文のフィードバック及び書き直しの後，グループ内で発表を行う。３名程度のグループを作って順番に発表を行うが，グループ内でビデオカメラで録画しながら発表を進める。

グループ活動の様子は資料１の通りである。少人数のグループ活動として口頭発表を行うため，聞き手を意識した発表を行うことができ，質疑応答も活発に行われるようになっていた。発表を聞いている学習者も発表者の内容やトピックに関して共通の知識を持っているため，互いが補い合いながら発表や質疑応答を



資料１　グループ発表の様子

行っている様子が窺えた。

教師から学習者へ知識・情報を伝える一方向的な学習ではなく，学習者同士が学ぶ仲間となり，互いが助け合って双方向的に学習が進められていることがわかった。

５．学期末のインタビュー結果及び今後の課題

本実践ではピア・ラーニングを取り入れてアウトプット能力の向上を目指した読解表現の授業を行ったが，学期末に実施した授業アンケートでは学習者自身の日本語力を向上させるうえで役に立ったという意見がほとんどであった。また，本実践に参加していた２名の学習者を対象にインタビューを行ったが，ピア・ラーニングやグループ活動に関する肯定的な意見が寄せられていた。以下，インタビューの内容を紹介する。（インタビューの内容は学習者の発話をそのまま文字起こししたものであり，下線は筆者らによるものである。）

《ピア・ラーニングを導入した学習法》

・私は今の読解のクラスの方法がいいと思います。その，今の読解のクラス多分文章を読んで音読もして，それでグループでみんなの意見を話して，その発表もあるし，作文も書くし，それでいろいろな違うスキルもう全部アップレベルアップ。

・特に私の友達は，例えば，○○○さんは，彼女は最初の文書を書くときに，英語で書いてそれで英語から日本語変える。でも私は，なんか，言葉の変える自分は日本語のアウトプットしたいから，それで，日本語の文章見てそれで自分の日本語の文書を，直接的に，まあこんな感じです。

《グループワークに関する意見》

・私は○○○さんの話，彼女の発表のレベルがとても高いと思いますので，それで彼女が話したときに私は「私もこんな流暢に話したい」と思います。でも今多分《笑い》私ももっと流暢になりました。

・例えば，「死刑廃止論」の文書について，グループでみんなの意見を合わしたときに，私はとても面白い，面白かったと思います。それで，みんなを違うグループになりました。○○○さんは死刑廃止論に反対した人，一方は，違う意見を，みんなを自分で本当に発表したのはよかった。多分最初に，先生は「この問題についてちょっと話して発表して」，でもみんなは緊張すぎたので，全然「ああ…」書いて最初は書きたい。原稿を書いて話した方がいいと思います。でもだんだん，死刑について発表したときに，みんなは本当に原稿はいらなかった。そのままで自分の考えを表してできるのはよかったです。多分私はこんな議論がいっぱいある文章も好きだから，私たちの生活にちょっと近い内容，今までの内容なんかちょっとポチティカルみたい，それでみんなはちょっと。

上記のインタビュー内容からも分かるように，読解の授業で答え合わせのような結果だけではなく学習のプロセスを認識できるようになったことや，グループ活動で仲間と助け合い，補い合って学んでいたことが窺える。舘岡（2013：193）ではピア・ラーニングの認知面でのメリットとして「リソースの増大」を挙げている。教師からは得られないであろう知識が仲間の学

習者から得られ，互いのつながりを活用して教え合ったりしていることが観察されたと述べられているが，本実践でも，上記のインタビューからわかるように，グループ内で助け合い，補い合い，一緒に学んでいることが窺える。

本実践の成果に基づいて今後はピア・ラーニングとアウトプット能力の相関を明らかにし教室現場に応用したいと考えている。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

舘岡洋子（2013）「日本語教育におけるピア・ラーニング」中谷素之・伊達崇達編著『ピア・ラーニング学びあいの心理学』金子書房，187-203

活動報告

FD 活動の報告
第80期・第81期（2019年度）日本語研修コース
第38期　上級日本語特別コース（2018年10月～2019年9月）
全学向け日本語プログラム　2019年度
学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」
短期留学生日本語プログラム　2019年度
第20期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース
オンライン日本語コースの運営
名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2019年度実施報告

FD 活動の報告

俵　山　雄　司

日本語･日本文化教育部門では，平成14年に FD 班を設け，以後，現在に至るまで，日本語・入門講義の授業を担当する教員全員で FD 活動に取り組んできた。さらに平成16年には，留学生センターの委員会として FD 委員会を設置し，教員個々の教授能力の向上，授業の改善を目指している。

今年度は，平成27年度に新たに策定した「平成28年度から32年（令和２年）度までの FD 活動計画」の４年目にあたる。以下に概要を示す。

平成28年度から32年度までの FD 活動計画

「成功例・要改善例の共有による教育改善」

①報告の執筆と共有

・年度ごとに，教員個人が１つの授業を取り上げ，そこで行った試みの成功事例（あるいは要改善となった事例）の報告を執筆する。報告は FD 担当者がとりまとめ冊子にして全員に配布。

②口頭による報告とディスカッション

・年度ごとに担当者が報告を２つ選び，それについて，授業者に発表してもらいディスカッションの機会を設ける。

上記のサイクルは，平成29（2017）年度末に①の報告を執筆するところから開始となった。なお，平成30（2018）年度から，カリキュラムの大幅な変更があったため，新カリキュラムに基づく授業の実施報告を行い，成果と課題を記述するものも可とした。今回の報告のタイトルを，報告対象となったコース別に示す。

日本語研修コース（EJ）

EJ の担当授業における Summary of the Grammar Points での取り組み

NUPACE 向け日本語コース（NP）

初級授業において語彙・文法項目を印象付けるための電子黒板の活用，NP１の副教材を使用した授業改善，NP１ Writing Practice 授業におけるスライド教材導入の試み，NP２における学習者の自己表現活動中心の授業運営，初級クラスにおける「会話練習」の試み，「NP４視聴解」―クラス内のレベルの差を緩和する，NP４視聴解表現　よりよいシラバスに向けて，NP５視聴解表現コースにおける協働の試み，NP８視聴解表現における情報伝達型の「ニュースを伝える」，スキャニング・スキミングの教材について

全学向け日本語コース（SJ）

グループワークによるディクテーション自己チェックの試み，自動詞･他動詞の定着に向けての試み，2019年度 SJ220読解・聴解，SJ220会話「初中級文法の効果的な教育を目指して」，SJ310読解における CEFR の利用，会話テストから考える目標達成に必要なコミュニケーションストラテジー，漢字Ⅲ（漢字500レベル）授業の試み，総合日本語Ⅰラジオドラマ制作における新たな課題と今後の目標設定に向けて，総合日本語Ⅱ漫画のノベライズ

学部留学生を対象とする言語文化科目

文系学部１年「日本語（文章表現）２」の活動と新しい試み―web ツール「iEmpathy」を導入して―，学部口頭表現クラス　聞き取りも取り入れたプレゼンテーション活動，学部理系口頭表現（秋学期）

入門講義

入門講義「日本文化論１」新テーマ導入の試み（継続）

次に，②の口頭による報告とディスカッションであるが，前年度2018年度末に提出された①の報告から２つを選んで，研修会として実施した。詳細を以下に示す。

(1)

日時：１月15日（水）午後１時～１時30分

場所：国際棟207教室
話題提供者：香川由紀子
タイトル：入門講義「日本文学Ｉ」―近代文学作品の選択―
内容：授業で購読する文学作品の選択基準について，授業目標との関連から紹介した。また，授業の進め方や，受講者の取り組みの様子などについて，提出物をもとに説明した。

(2)
日時：１月15日（水）午後１時30分～２時
場所：国際棟207教室
話題提供者：永澤済
タイトル:上級日本語（文章表現）　留学生への作文教育―クラスにおける相互の高め合い
内容：ドキュメンタリー番組の要旨作成から文章構成を意識化させる活動，本や映画の紹介文を読みあう活動などについて，提出物をもとに，紹介した。

この研修会には，国際言語センターの専任教員及び非常勤講師合わせて約15名が出席し，活発な質疑応答や議論が行われた。
　なお，上記の研修会以外に，特別 FD として，下記の研修会も実施した。参加者は約20名であった。

(3)
日時：10月23日（水）午後３時30分～４時30分
場所：国際棟206教室
話題提供者：渡辺芳人（東海国立大学機構審議官，前名古屋大学理事）
タイトル：名古屋大学が目指してきた国際化
内容：名古屋大学が進めてきた各種の国際化戦略について説明し，その後，国際化における日本語教育の貢献について，意見交換を行った。

第80期・第81期（2019年度）日本語研修コース

佐　藤　弘　毅

１．コース概要

名古屋大学国際機構国際言語センターの日本語研修コースは，これから日本の大学で学ぼうとする国費留学生を対象とし，６か月間の日本語研修を行う予備教育コースである。全くあるいはほとんど日本語を勉強したことがない学生を対象とする初級日本語特別プログラム（EJ コース）を基本とするが，近年すでに日本語を勉強したことがある学生も増えており，また専門の勉強を優先したい学生もいるため，短期留学生日本語プログラム（NP コース）や全学向け日本語プログラム（SJ コース）も選択でき，多様なニーズに配慮している。

２．研修生

第80期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計21名であった。このうち，18名が名古屋大学に進学予定であり，その内訳は工学部・工学研究科５名，多元数理科学研究科１名，農学部･生命農学研究科４名，文学部・人文学研究科１名，法学部・法学研究科１名，国際開発研究科６名であった。それ以外の２名が総合研究大学院大学，１名が名古屋市立大学に進学予定であった。出身国は17ヶ国であった。コースの開始前に受講生の専門の指導教員と連絡をとり，大学院入学試験の時期やその準備に必要な時間数，ゼミ出席の頻度などを考慮した上で受講させたい日本語プログラムを聴取した。その結果と受講生本人の希望に基づき，どのプログラムを受講するかを決定した。その結果，６名の学生が NP コースを，１名が SJ コースを受講することとなり，残りの14名が EJ コースを受講することとなった。

第81期日本語研修コースの受講生もすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計８名であった。このうち２名が名古屋大学に進学予定の研究留学生であり，その内訳は人文学研究科１名，国際開発研究科１名であった。それ以外の５名が愛知教育大学，１名が滋賀大学で研修を続ける教員研修生であった。出身国は８ヶ国であった。第80期と同様に指導教員と連絡をとり，受講者本人の希望も考慮して受講プログラムの決定を行った。その結果，２名が NP コースを，残りの６名が EJ コースを受講することとなった。

以下，EJ コースのクラス編成，内容について報告する。

３．クラス編成

近年の国費留学生対象の日本語研修コース，日本語・日本文化研修コースの配置人数の減少に対応するため，2018年度より EJ コースに短期留学生を受け入れられるよう体制を変更し，また１日３コマ・週15コマ・15週間のコースから，１日２コマ・週10コマ・15週間のコースとすることとした。

授業は，第80期においては７名ずつの２クラス編成とし，第81期においては６名による１クラス編成とした。専任教員１名，非常勤講師６名の計７名が担当した。

４．時間割と日程

第80期においては４月11日から８月２日まで15週間の授業を行い，夏休みを挟んで９月に修了式を実施するという日程とした。第81期においては10月２日から２月４日まで15週間の授業を行い，３月に修了式を実施するという日程とした。

授業は月曜日から金曜日まで，午前８時45分から12時00分まで90分授業を２コマ行った。開講式の前に到着時のオリエンテーションを行った。オリエンテーションでは，名古屋大学での日本語教育の全体像及び日本語研修コースの概要を説明し，その後，未習

者には学習背景アンケート，既習者には受講プログラムを決定するためのプレースメントテストとインタビュー，さらに学習背景アンケートも行った。

５．カリキュラム

2018年度の第78期より日本語プログラム及びカリキュラム改革を実施し，EJ コースの主教材はこれまで使用していた A Course in Modern Japanese（Revised Edition），Vols. 1 & 2（名古屋大学日本語教育研究グループ編）から，A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE, Vols. 1 and 2（西口光一著，以下 NEJ）に変更した。NEJ の Unit 1 から Unit 24までを扱った。学習活動を大きく課外学習と教室内学習に分け，教室内学習はさらに評価対象活動とその他の活動に分類し，それらが視覚的に理解できるようにスケジュールを作成，配布した。

EJ コースの主な学習項目，NEJ の各 Unit の学習の基本的な流れは以下の通りである。○印は課外活動，●印は評価対象活動を示している。表１には１週間のスケジュール例を示す。

１）Hiragana／Katakana

● Hiragana Quiz／Katakana Quiz

担当教員が作成したオリジナルのシートを用いて行う。

２）Goal Description／Grasping Master Text

○ Listening／Understanding Section 1

各 Unit の目標を示す。Section 1の音声を聞いて Master Text の概要を把握する。

３）Section 1／2

Section 1の Master Text について，スライドを見ながら音声を聞き，パラレルリーディングの練習を行う。必要に応じて語彙や文法事項を確認する。その後，シャドーイング練習を行う。

Section 2はペアワークなどを取り入れながら，Section 1の内容についての Q&A 練習を行う。

４）Unit 1–6 Section 3／4，Unit 7–24 Section 2–4

語彙や文法事項の解説，練習を行う。

５）○ Unit 1–6 Section 5／Unit 7–24 Section 1 Read Aloud Practice

● Unit 1–6 Section 5／Unit 7–24 Section 1 Read Aloud

課外学習で読む練習を行う。教室内学習では１人ずつ読んで，教師は評価とフィードバックを行う。

６）The Gist of Japanese Grammar／Grammar Practice Sheets

○ Review Grammar Practice Sheets／Writing Practice Sheet

● Grammar Practice Sheets-Quiz

文法の練習とクイズを行う。

７）Writing Practice Sheets（漢字）

○ Review Grammar Practice Sheets／Writing Practice Sheet

● Writing Practice Sheets-Quiz

漢字の練習とクイズを行う。

８）Essay Writing

Master Text をモデルに，各自の事柄について作文を書く。

９）Essay Correcting／Essay Sharing

教師のチェックとフィードバックに基づき，間違えた箇所について自己修正を行う。その後，他の受講者と音読により共有する。

10）● Show and Tell

いくつかの Unit の Essay をまとめた内容についてスクリプトを書き，写真やスライドを各自で用意して発表する。その後，教師は評価とフィードバックを行う。各期に計10回行った。

11）● Test／Test Feedback

６つの Unit ごとに筆記テストを行う。各期に計４回行った。

12）Extensive Reading

担当教員が作成したオリジナルの教材を用い，多読を行う。各期に計３回行った。

６．評価アンケート

各期のコース終了時には，授業評価アンケートを実施した。

専門と日本語学習の両立についての質問に対しては，これまでと同様，特に進学予定の研究留学生から入試準備や専門の勉強と日本語学習の両立が大変だったという回答が目立った。コース途中に入試が実施される研究科も多く，また，コース終了後の入試であっても，事前に研究計画書等を準備しなければならないため，それに時間を取られる学生が多い。

授業内容に関する質問に対しては，概ね「役に立っ

た」「満足している」という高評価が目立った。特にExtensive Readingについては，どの期も好評であった。

今後も，これらのアンケート結果を参考にしながら，適宜，カリキュラム，教室活動，評価対象活動の見直しを行っていく必要があるだろう。

表１　１週間のスケジュール例

Date / Period		Class Activity	Preparation for tomorrow
11月11日（月）	1st	● Unit 8 Section 1 Read Aloud ○ Unit 8 Writing Practice Sheets	
	2nd	● Unit 8 Grammar Practice Sheets-Quiz ○ Unit 8 Essay Writing ○ Unit 9 Goal Description Grasping Master Text	○ Unit 9 Listening Section 1A–1, 2, 1B–1, 2
11月12日（火）	1st	○ Unit 9 Section 1A–1, (2) ○ Unit 9 Section 2 Useful Expressions 1	
	2nd	○ Unit 9 Section 1B–1, 2 ○ Unit 2 Section 2 Useful Expressions 2	○ Unit 8 Writing Practice Sheets
11月13日（水）	1st	● Unit 8 Writing Practice Sheets クイズ ○ Unit 8 Essay Correcting Essay Sharing（Read Aloud）	
	2nd	○ Unit 9 The Gist of Japanese Grammar ○ Unit 9 Section 3 Verb Inflection 2 ○ Unit 9 Grammar Practice Sheets	○ Unit 9 Grammar Practice Sheets ○ Unit 9 Section 1 Read Aloud Practice
11月14日（木）	1st	● Unit 9 Section 1 Read Aloud ○ Unit 9 Writing Practice Sheets ○ Unit 9 Essay Writing	
	2nd	● Unit 9 Grammar Practice Sheets-Quiz ○ Unit 10 Goal Description Grasping Master Text	○ Unit 10 Listening Section 1–1, 2
11月15日（金）	1st	○ Unit 10 Section 1–1 ○ Unit 10 The Gist of Japanese Grammar ○ Unit 10 Section 2 Useful Expressions	
	2nd	○ Unit 10 Section 1–2 ○ Unit 10 Section 4 Verb Inflection ③	○ Unit 10 Section 1 Read Aloud Practice

第38期　上級日本語特別コース（2018年10月～2019年９月）

永　澤　　済

第38期上級日本語特別コースは，「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「基礎的な研究方法の習得と実践」の３つを目標として行った。

学習者は，12カ国から17名（インドネシア：３名，中国：３名，インド：２名，アメリカ：１名，イラン：１名，韓国：１名，カンボジア：１名，コロンビア：１名，タジキスタン：１名，ブラジル：１名，ベルギー：１名，ポーランド：１名）であった。また，９名の教員が指導に当たった。

以下，主要なプログラムについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～４月）

『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ』『名古屋大学日本語コース中級Ⅱ』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ　聴解ワークシート』名古屋大学　日本語コース中級Ⅱ　聴解ワークシート』（以上，名古屋大学日本語教育研究グループ編）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として，「プリテスト（既習事項の確認）」「復習クイズ（各課の復讐）」「文法補足説明」を使用した。また，３課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては，録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話（10月～４月）

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから，社会における様々な場における会話力（表現力，運用能力）を高めることを狙いとして，「応用会話」を行った。教材として，各種のモデル会話などを使用した。

(3) 入門講義（10月～７月）

「日本に関する基礎的理解」「基礎的な研究方法の習得」を狙いとして，10月～２月（前期）および４月～７月（後期）の期間，前期４科目，後期３科目の入門講義を14回（各90分）行った。前期の開講科目は「日本文化論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」，後期は「日本文化論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は，前期は４科目のうち３科目以上を選択，後期は３科目のうち２科目以上を選択することとした。なお，入門講義は全学留学生が受講できるものであり，大学院研究生，短期交換留学生などとともに受講した。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（１月～５月）

大学での文章執筆に必要な基礎知識を身に付けることを狙いとして，「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立つ表現」「引用の仕方」などについて学習した。

(5) 読解（10月～４月）

読解として，「精読」（教科書の読解教材に代わるもの），「新聞読解」，「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの），「本の読解」（エッセイ・小説など，教員が用意したものの中から，学習者が興味のあるものを選択），「特別読解」（学習者が，新聞などから自分で記事を見つけ，授業でも教師役をする）などを行った。

(6) 上級文法・語彙（兼 N1対策）（10月～４月）

上級レベルの文法・語彙の練習問題（18回分）を作成し，使用した。これは，日本語能力試験（N1）の準備を兼ねるものである。

(7) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～７月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして，「漢字テスト」（20回）を行った。また，漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（４回）を実施した。

(8) スピーチ（10月～７月）

自国の紹介，本や映画の紹介，ふだん考えているこ

と等のトピックについて，スピーチを行った（１人，１回，５分程度，スピーチ後に質疑応答／数回実施）。

(9) 総合演習（12月／５月～７月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し，学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

前期：「名古屋の名物について知ろう」（１週間）
後期：「ことばと遊び」（１週間），「やきもの，お茶とお菓子」（３週間）

(10) 文章表現（４月～７月）

①レポート

日本語による探究活動，アカデミックライティングや情報探索の基礎を学ぶことを目的に，各自の関心に応じてテーマを設定し，レポートを作成した。また同テーマで口頭発表を行った。

〈タイトル一覧〉

情報化時代における日本人の漢字の記述力の低下／日本の詩とペルシャ詩における秋のイメージ／存在表現「いる」「ある」の区別調査／日本語における結婚相手の呼称／給食／子供の明るい未来を――いじめ地獄から／進化して来た我々のカメラ／茶道／日本とカンボジアの発酵食品／牛に関する日中諺の比較／日本の漫才におけるボケとツッコミ／日本人の，「頑張って」という言葉／名古屋弁／けん玉――子どもから大人まで楽しめる伝統的な日本の遊び／テレビドラマにおける感動詞「そう」の機能～音調的特徴による分類～／江戸時代における百人一首の起源

②エッセイ

留学の集大成として自己を見つめ，思い出を書き残すことを目的に800字程度のエッセイを執筆した。限られた字数の中でテーマを絞って書くことを意識化し，レポートと異なるスタイルの文章表現を学んだ。

〈タイトル一覧〉

妖艶なる世界につき／再び学んだ美／青春の旅／新しい目標／新しい目標／伝統と現代の完璧な合奏―日本／留学の意味とは／中部と関西を巡る自転車旅／彩／巣から離れた燕／奈良の鹿／１日でさえも大切に／人生はブーメラン／四季の味わい／４×３＝１／日本の留学の愉しみ方／いつでもどうぞ

(11) その他

以上に加えて，本学の学部生向けに開講されている教養科目の１つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

(12) アンケート

2019年７月に，学習者に対して，コースの内容などに関する詳細なアンケートを行った（回答者計16名）。以下，「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問についての回答である。全体として満足度は高く自身の向上を自覚できている。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	０人	０人	３人	13人

(13) 今後に向けて

学生は課題・活動に熱心に取り組み，成果を挙げた。本コースの第一の目標は，留学以前に身につけた日本語の基礎力を強化し，自由な運用につなげることである。第二は，身につけた日本語力を通して，学問の基礎となる広い視野や多角的な分析力を養うことである。第一の目標「日本語を学ぶ」は比較的よく達成した。今後は第二の目標「日本語で学ぶ」への橋渡しの機能を一層高めたい。

全学向け日本語プログラム　2019年度

俵　山　雄　司

１．プログラムの概要

このプログラムは，名古屋大学に在籍する留学生（大学院生・研究生など），研究員，教職員などを対象に，日常生活や大学での研究生活に必要な日本語の運用能力を養成するための複数のコースを提供している。

2019年度の開講期間は，春学期が2019年４月12日（金）から７月29日（月）まで（14週），秋学期が10月15日（火）から2020年２月３日（月）まで（14週）であった。

２．カリキュラム

プログラムは，大きく分けて以下の２つのコースから構成されている。

(1) 初級・中級コース

ゼロ初級から中級後半までの学習者を対象とした，レベル別のコースである。受講者は，学期前に実施されるプレイスメントテストによって，７つのレベルのコースに振り分けられる。初級Ⅰ（SJ110）から初級Ⅲ（SJ210）の３つのレベルでは，週３コマの授業がすべて内容的に連続しており，14週間で計42コマを通して学ぶことで日本語力の伸長を図るものである。それに続く，初中級（SJ220）から中級Ⅲ（SJ330）までの４つのレベルでは，週３コマはそれぞれ，読解・聴解・会話というスキル別の編成になっており，週１コマだけを選んで受講することも可能となっている。これ以外に，アラカルト科目として，レベル別の漢字クラス（漢字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ），「オンライン漢字」コースも用意されている。

レベル別コース

初級Ⅰ（SJ110）	週３コマ		
初級Ⅱ（SJ120）	週３コマ		
初級Ⅲ（SJ210）	週３コマ		
初中級（SJ220）	読解	聴解	会話
中級Ⅰ（SJ310）	読解	聴解	会話
中級Ⅱ（SJ320）	読解	聴解	会話
中級Ⅲ（SJ330）	読解	聴解	会話

アラカルト科目（自由選択）

漢字Ⅰ	漢字Ⅱ	漢字Ⅲ	OL 漢字

(2) 上級コース

上級コースは，日本語能力試験Ｎ１あるいは Ｎ２レベルに既に合格した者を対象としたコースである。４種類の「総合日本語」（各週１回180分）クラスと，３種類の「入門講義」（各週１回90分）クラスから構成されている。前者は，ラジオドラマ・漫画のノベライズ作品・小雑誌などを作成するプロジェクトの遂行を通して，読む・聞く・書く・話すといった日本語の各技能を統合的に育成するもので，後者は人文系の専門分野（日本語学・日本文化・日本文学）に関する入門的な知識について，やさしい日本語を用いた講義形式で学ぶものである。いずれも，受講したいものを自由に選択して履修することができる。これ以外に，web を通した添削を含む「オンライン読解・作文」コースも用意されている。

アラカルト科目（自由選択）

総合 日本語Ａ	総合 日本語Ｂ	総合 日本語Ｃ	総合 日本語Ｄ
入門講義 日本語学	入門講義 日本文化	入門講義 日本文学	オンライン 読解・作文

３．受講状況

受講登録を行った者は，春学期216名，秋学期351名であった。受講登録者を属性別にみると以下のようになる。

	春学期	秋学期
博士前期学生	69	102
博士後期学生	49	71
研究生	50	128
研究員	22	25
教職員	7	9
学部生	2	0
その他	17	16
計	216	351

春学期は博士前期学生・研究生・博士後期学生の順で受講者が多く，後期は，１位と２位が入れ替わり，研究生が最も多くなる。一方で，年間を通して，博士後期学生の受講も多いことがわかる。

次に，受講登録者を所属先別にみると以下のようになる。

	春学期	秋学期
文学部・人文学研究科	18	32
教育学部・教育発達科学研究科	7	4
法学部・法学研究科	30	40
経済学部・経済学研究科	9	19
情報学部・情報学研究科	11	23
理学部・理学研究科	11	18
医学部・医学研究科	11	18
工学部・工学研究科	45	90
農学部・生命農学研究科	7	22
国際開発研究科	30	35
多元数理科学研究科	4	9
環境学研究科	23	31
その他	10	10
計	216	351

春学期は工学部・工学研究科が最も多く，受講者全体の20％以上を占め，それに，法学部・法学研究科や国際開発研究科が同数で続く。秋学期は，工学部・工学研究科がトップであることは変わらないものの，割合は25％を超える。それに，法学研究科，国際開発研究科が続いており，トップ３の顔ぶれは春・秋学期を通じて同じである。

４．今期の評価と今後の課題

本プログラムでは，コース運営やカリキュラムの改善のため，全コースで受講者を対象としたアンケートを実施している。今回は，２年前に大きなカリキュラム改変を行った初級レベルのうち，初級Ⅰ（SJ110）と初級Ⅱ（SJ120）のアンケートの内容について取り上げる。回答者数は，前者が55名，後者が12名であった。

このコースの良い点（good points）を尋ねた項目の回答（自由記述）では，教師の対応を評価した回答が目立った。初級Ⅰでは10名，初級Ⅱでは１名が「親切（kind, nice）」や「熱心（enthusiastic）」といった言葉で，教師の対応を好意的に評価している。一方，改善点（aspects could be improved）を尋ねた項目の回答（自由記述）では，会話（speaking）の練習を増やしてほしいという要望（初級Ⅰは６名，初級Ⅱは１名），動画教材が欲しいという要望（初級Ⅰのみ３名）が見られた。今後，かけられる時間や労力も考慮しつつ，要望については検討していきたい。

また，今期は中級Ⅰ（SJ310）と中級Ⅱ（SJ320）の一部のクラスで，ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のレベルに準拠した目標設定や教授項目選定を試行した。受講者の自己評価を取り入れられなかった点や複数技能の統合がうまくいかなかった点などの課題はあるが，能力記述文をベースとしてクラスを設計することで，教師が常に目標を意識して授業に取り組める意識を持つことができるように感じられた。次年度は，この取り組みを中級コース全体に拡げていく予定である。

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮　葉　正　親

学部に在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには，講義を聴く，ノートをとる，ゼミで発表する，レポート・答案を書く，ディスカッションをするなど，高度な日本語運用能力が要求される。授業ではそのための訓練を行うとともに，日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2019年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
１期（１年前期）	文系	文章表現	月３限	藤森秀美	8
		口頭表現	木３限	西田瑞生	8
	理系	文章表現	火２限	浮葉正親	7
		口頭表現	木２限	西田瑞生	7
	工学（国）	口頭表現	月２限	藤森秀美	3
		文章表現	水２限	永澤　済	3
	工学（私）	文章表現	月２限	西田瑞生	3
		口頭表現	水２限	鷲見幸美	3
２期（１年後期）	文系	文章表現	金２限	馬場典子	8
		口頭表現	木３限	西田瑞生	8
	理系	文章表現	火２限	西田瑞生	6
		口頭表現	木２限	永澤　済	6
	工学（国）	口頭表現	月２限	西田瑞生	2
		文章表現	水１限	浮葉正親	2
	工学（私）	文章表現	月２限	藤森秀美	2
		口頭表現	水１限	鷲見幸美	2
３期（２年前期）	文系	文章表現	火１限	永澤　済	5
４期（２年後期）	文系	文章表現	木１限	永澤　済	5

クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科＆コンピュータ科学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

授業内容

１年前期

文系・文章表現

大学生活で必要なメールの書き方を学び，書く練習を行った。次に，書き言葉と話し言葉，意見レポートの表現・語彙，要約，引用を学んだあと，各自のテーマで，意見レポートを書いた。

レポートの作成は①適切なテーマを選ぶ②適切な論拠に基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い，コメントを元に書きなおす作業を行った。

文系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるために，構造的なわかりやすさということ

に注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

理系・文章表現

短い文章からはじめて徐々に長い文章を書く練習を行った後で，各自がテーマを設定し，いくつかの文章を読んでまとめる最終レポートを執筆した。最終レポートについては，テーマ設定，材料集めやアウトラインの作成などを授業中の作業や宿題によって少しずつ進めていった。

理系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。構造的なわかりやすさということに注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。学問の基礎である比較，対照の方法の表現も学んだ。

工学系（国費）・文章表現

各回，ニュースを視聴・読解し，表現や表現法を学んだ。それをもとに要約や考察を執筆し，大学で必要な文章の基礎力を養った。多様なトピックを通して，文化，社会，科学等に関する基本的な内容を，日本語で理解し伝える総合力を養った。また，互いのレポートを読み合い，文章の構成，表現，テーマの選択等について理解を深めた。

工学系（国費）・口頭表現

さまざまな講義を聞き，ノートをとる練習を行った。

また，スピーチ，ディスカッションを行った。終了後はふりかえりのために，教師と学生で評価表を用いて評価し，そのずれを話し合った。

図表・データ，比較，因果関係，質疑応答の表現を学び，さまざまな練習をしたあとで，プレゼンテーションを行った。プレゼンにふさわしいテーマを選び，データを集め，そこからどのような結論が導けるか考えるという手順で授業を進めた。

工学系（私費）・文章表現

大学生活，とくに，学会やクラスでの文章作成において必要な魅力的でしっかりした構造の文章表現ができるようになるための練習をした。いくつかのトピックを書く場合に，同じトピックのものをまとめて書くグルーピング，トピックをまとめたものを最初に書くラベリング，どの順序で書くかというオーダリングを考え，比較，対照によって文章をわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

工学系（私費）・口頭表現

1）自分の経験を語る３分間スピーチを２回ずつ行った。録音・文字化をし，振り返りにも時間をかけた。2）４つのテーマで説明のプレゼンテーションを行った。２テーマは口頭のみ，２テーマはスライドを用いて実践した。録画をし，振り返りによって課題を見つけ，再度同じテーマで実践することを繰り返した。3）視聴覚生素材，新聞記事を使用して，内容をまとめて報告する活動を行った。4)『理工系留学生のための重要漢字―単語と例文―』の自習をし，毎週漢字クイズを行った。

1年後期

文系・文章表現

授業を前半と後半に分け，前半はより高度な日本語表現を駆使するための，文章表現のルールを学び，後半は新聞記事などの生教材を読んで自分の考えをまとめ，ディスカッションを行った。また最後の５回の授業では，「相手に共感してもらう文章を書くには」というテーマで，iEmpathy（アイエンパシー：エンパシーライティング（共感文章術）というメソッドのデジタル版）を用い，自己紹介文とフェアトレード商品の紹介文を作成した。

文系・口頭表現

「在宅勤務」「結婚」「学歴」をテーマとした新聞記事などを読んだ後，その内容を元にディスカッション・ディベート・プレゼンテーションを行った。そのうち，ディスカッション・ディベートについては動画を撮影

し，各自で振り返りを行った。また，各活動の後には，「役立ちそうな表現」「自分の話し方の利点･欠点」「その活動の際に大切だと思うこと」について記述させ，学期末に総合的な振り返りを行った。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み，その中で使われる書式や表現を学習した。また，語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み，それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方，図表の作り方やその説明など，レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。

理系・口頭表現

前期に引き続き，談話をわかりやすくする構造的条件を考えながら，より魅力的に話す練習をした。自分の国について特定の条件を設けてプレゼンテーションしてから，名古屋についてテーマを設定しフィールドワークを通して知ったことをグループで紹介するということを，ディスカッションをするという練習もしながら行った。

工学系（国費）・文章表現

前期に引き続き，文章をわかりやすくする構造的条件を考えながら，より魅力的に書く練習をした。クラスメートの興味のある分野について，プレゼンテーション（とディスカッション）を聞いて，それをもとに，自らの意見や知っていることなども加えて作文をするという練習も行った。

工学系（国費）・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるために，構造的なわかりやすさに注目し，魅力的に話す練習をした。自分の興味のある分野をえらび，お互いの国や地域を比較，対照しながら，クラスメートにも興味を持ってもらえるようにプレゼンテーションすることと好きな動画（番組）について，構成を考えて動画を見せながら紹介する練習をした。

工学系（私費）・文章表現

パラグラフライティングに重点を置き，パラグラフ内の構成，次にパラグラフをいかにつなげるかを学んだあと，論証型レポートを書いた。

レポートの作成は①論証型レポートにふさわしいテーマを各自選ぶ②データに基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い，学生・教師からのコメントを元に書きなおす作業を行った。

工学系（私費）・口頭表現

２名のうち１名は遅刻・欠席が続き，後半は１名のみでの授業となったため，柔軟に１名の受講生に合わせた内容となった。「新聞記事を題材にした３分間スピーチ」と「川柳の鑑賞･作成」は計画通り実行した。１名の受講生の興味・関心に合わせた記事を毎回用意し，遅刻や無断欠席による待ち時間を利用して教員との間で内容の確認，意見の交換を行った。慣用表現などの学習にもあてた。「ポスター発表」を中心的な活動とした点は計画通りだが，活動内容や進度を１名の受講生のレディネスに合わせて調整した。

２年前期

文系・文章表現

後期の執筆活動に向けて準備的教育を行った。各回，ニュースを視聴(シャドーイング･ディクテーションを含む)･読解し，表現を学ぶとともに，テーマを的確に捉えて文章にまとめる練習を行った。ディスカッションを通して考察を深め，最後に文章にまとめた。以上を通して表現の幅を広げるとともに，広い視野と多角的な見方を養った。

２年後期

文系・文章表現

前期の授業をもとに，本格的な執筆活動に入った。各執筆課題（ドキュメンタリー番組の要旨説明，本や映画の紹介，エッセイ，他の授業で書いたレポートの改稿）を通して，文章の基本（オリジナルの内容を適切な表現で伝える）を養った。

短期留学生日本語プログラム　2019年度

石　﨑　俊　子

１．2019年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2018年度に従来の全学の日本語クラスと NUPACE の合同の日本語のクラスを分け，NUPACE 単独の日本語クラスを初級から上級までの８つのレベル（NP１～NP８）で再編成し，2019年度はプログラム施行２年目であった。NP１～３コースは週５コマで，NP１はゼロスタートから初級初期レベル，NP２は初級初期レベルから初級中期レベル，NP３は初級後期レベルの文法，聴解，読解，作文，会話などの技能を網羅しており，修了したものには５単位が認定される。NP４～６コースはレベルやニーズに合わせて読解＆表現（週２コマ），視聴解＆表現（週２コマ），文法（週１コマ），NP７と８コースは読解＆表現（週２コマ），視聴解＆表現（週２コマ），研究発表（週１コマ）を技能別に受講することが可能であり，１～５単位が認定される。NP４は中級前期レベル，NP５は中級中期レベル，NP６は中級後期レベル，NP７は中上級レベル，NP８は上級レベル相当の授業の内容である。

上記の日本語コースに加え，全学の日本語コースである「漢字コース」の４科目（週１コマ），「総合日本語」の４科目（週１コマ），「入門講義」４科目（週１コマ）と G30プログラムの日本語コースである「ビジネス日本語」４科目（週１コマ），「アカデミック日本語」８科目（週１コマ）の受講も可能である。「漢字コース」と「総合日本語」は１単位，「入門講義」は２単位を認定している。これらのコースの詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。「ビジネス日本語」と「アカデミック日本語」修了者には1.5単位を認定している。

また，単位を必要としない学生は全学の日本語コース（週３コマ）およびオンライン作文，オンライン漢字コースの受講が可能である。

２．成績評価

全学と評価基準に揃えてあり，下記の表のとおりである。出席率が80％以下の者に対しては59点以下の成績と同じくＦとなる。（表１を参照）

表１　成績認定基準

成績	成績評価（100点満点）
S	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下

３．登録状況

表２は春学期と秋学期の NUPACE の日本語コースの受講者数を示したものである。受講者数は春学期には短期留学生の79% に相当する146名中116名（異なり数），秋学期においては86% に相当する156名中134名（異なり数）が日本語を受講している。この割合は例年とはさほど変化がない。

また，受講者の延べ人数でみると，受講生が春学期に211名，秋学期に275名となっている。2018年度の春学期282名，秋学期295名と比較すると春学期の受講者の減少が目立つ。

４．今後の課題

上級レベルに多くの受講生が集中したということから従来の一番上のレベルのコースの更に上のレベルである NP８コース（視聴解＆表現２クラス，読解＆表現２クラスと研究発表１クラス）を増やし，開講した。しかしながら，2018年春学期は NP８研究発表を受講した学生が１名のみという結果に終わり，秋学期は閉講した。NP８の他のクラスについても2018年春学期と秋学期とも全クラス６人以下の受講生であったため，2019年度は NP８コースの開講はなしという方

向で進める。又，NP１は４クラス開講したが，2019年度は２クラスで十分だと考える。

2019年度の秋学期に行ったアンケートによると，初級，中級レベルの学生の日本語の授業に対するニーズは店やレストランの店員との会話を始めとした日本で生活するための日常会話ができることであったが，上級レベルになると生活だけではなく研究の面でも質を向上させるための日本語を必要とし，目標としていることが明らかになった。つまり，各自の専門科目の勉学，研究活動に比重を置くようになり，日本語の学習に対するニーズにも変化が見られているということが窺える。従って，NUPACEの学生に対する日本語コースの開講は継続するものの，学生のニーズの変化に柔軟に対応できるコースの開講も目指していきたいと考える。

表２　2019年春学期と秋学期の受講者数

日本語科目名	単位数	2019春 受講人数	2019秋 受講人数
NP１a	5	9	12
NP１b	5	14	10
NP１c	5	NA	13
NP１d	5	NA	9
NP２a	5	7	12
NP２b	5	9	7
NP３	5	11	9
NP４文法	1	17	16
NP４ 読解・作文・プレゼンテーション	2	6	15
NP４ 聴解・プレゼンテーション	2	15	15
NP５文法	1	5	12
NP５読解・作文・プレゼンテーション	2	5	10
NP５ 聴解・プレゼンテーション	2	6	10
NP６文法	1	14	12
NP６ 読解・作文・プレゼンテーション	2	10	8
NP６ 聴解・プレゼンテーション	2	10	8
NP７ 研究発表	1	5	1
NP７ 読解・作文・プレゼンテーション	2	7	2
NP７ 聴解・プレゼンテーション	2	7	4
NP８ 研究発表	1	1	NA
NP８ 読解・作文・プレゼンテーション	2	5	6
NP８ 聴解・プレゼンテーション	2	2	3
総合日本語１	2	5	13
総合日本語２	2	1	5
総合日本語３	2	0	4
総合日本語４	2	1	2
漢字Ⅰａ	1	6	8
漢字Ⅰｂ	1	5	14
漢字Ⅱ	1	7	9
漢字Ⅲ	1	14	21
漢字Ⅳ	1	7	5
合計		211	275

第20期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

李　　澤　熊

１．経緯

1998年に開催された日韓首脳会談において「21世紀のための新たなパートナーシップ」共同宣言の行動計画の一環として「日韓共同理工系学部留学生事業」が開始されることが決まった。本学工学部もこの事業により派遣される留学生を受け入れることになり，2000年から学部入学予定者に対する予備教育課程として，このコースが始まった。なお，この事業は，今年度を（20期）をもって受け入れ終了となる。

２．目標

このコースは，工学部入学後，学部での勉学や生活に支障のないように，日本語運用能力を養成することを目的に行われた。日常生活に必要な会話練習のほか，ディスカッションをする・科学読み物を読む・レポートを書く・講義形式のまとまりのある話を聴く等の練習を行った。また，教養科目，日本事情の授業を通じて日本文化に対する理解を深めることも目標とした。

以下，2019年度の日本語教育について報告する。なお，2019年度は５名の学生（20期生）を対象に開講された。

３．日程と時間割

日程と時間割は，以下の通りである。

【日程】

９月27日（金）開講式
10月１日（火）日本語オリエンテーション・日本語診断テスト
10月７日（月）授業開始
12月25日（火）～１月13日（月）　冬休み期間
２月４日（火）工学部入試のため休講
２月18日（火）レポート発表会
２月20日（木）修了試験
３月２日（月）修了式

【時間割】

	月	火	水	木	金
１限 ８：45－10：15	読解表現	漢字・語彙	数学	文法・談話	会話
	俵山	ミン	高橋	李	立見
２限 10：30－12：00	教養科目（留学生と日本語）	日本事情	物理	会話	作文
	浮葉ほか	ミン	高橋	柴田	立見
３限 13：00－14：30	会話		化学	作文	聴解表現
	村田		山腰	村田	柴田

工学部７号館123教室

４．科目内容

以上の授業を10月から２月までの15週間行った。以下，主な科目の授業内容を報告する。

【会話】（柴田，立見，村田）

使用教材：

『現代日本語コース　中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』名古屋大学出版会

到達目標：

キャンパス内，日常生活で遭遇する場面を想定し，目的をもって，会話の相手とスムーズに話すことができる。

授業の進め方：

①１課を２回に分けて進めた。（★は各課の必須学習

項目）

１回目：★会話１（Voc. + Exp.），文法・談話解説，★用法練習１と２

２回目：★会話２（Voc. + Exp.），★用法練習３と４，談話練習，文法練習

②４～５課ごと（前半は４課ごと，後半は５課ごと）に，課の振り返りのテストを行った。テストの内容は，ロールプレイ（RP；１問）と談話完成テスト（DCT；５問）である。

【作文】（立見，村田）

使用教材：

・田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート　読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版

・大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2016）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現［第２版］―プロセス重視のレポート作成―』ひつじ書房

・自作教材（ワークシート・資料）

到達目標：

①「読み手」を意識して文章が書けるようになる。

②アカデミック･ライティング（パラグラフ･ライティング）のルールを守って書けるようになる。

③事実に，自分の意見や感想を加えて述べることができるようになる。

④ピア・レスポンスやリライトの活動を通して，自己／他者の文章を批判的に読み，推敲する力を身につける。

授業の進め方：

「１時間目」

①その課で学習するモード（文章のタイプ）について，教師が講義を行った。講義部分では，PPT を使用し，作文の具体的なサンプルを示し，サンプル文の分析を通して，文章構造を可視化した（約30～45分）。

②提示したプロンプトに基づき，課題の作文を執筆させた（約45～60分）。授業時間内に書き上げられなかった場合は宿題とし，別途設定した提出期限内に教師にメールで提出させた。

「２時間目」

①１時間目に執筆し，教師に提出した作文に基づき，２～３人のペアあるいはグループで，ピア・レスポンスの活動を行った（約60分）。ピア･レスポンスの活動では，執筆作文をペアあるいはグループで交換して読み合い，良かった点・分かりにくかった点・改善方法を共有した。

②ピア・レスポンスの活動を踏まえ，作文のリライトを行った(約30分)。リライト作文は，別途設定した提出期限内に教師にメールで提出させた（リライト作文を成績評価の対象とした)。

【聴解表現】（柴田）

使用教材：

以下の教材をもとにしたプリントを配布。また NHKWeb ニュースなど，報道各社がアップロードしている動画などを扱った。

・『聴くトレーニング　聴解・聴読解応用編』スリーエーネットワーク

・『上級の力をつける聴解ストラテジー　上･下』凡人社

・『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ　聴解［中上級］』東京外国語大学留学生日本語教育センター

・『BTJ ビジネス日本語能力テスト聴解・聴読解実力養成問題集』スリーエーネットワーク

・『声に出して読みたい方言』草思社

到達目標：

①何が要求されているのか理解し，必要な情報を聴き取ることができる。

②聴き取った言葉の意味を文脈から推測することができる。

③ニュースなどの動画について，内容を十分に理解できる。

授業の進め方：

①プリントを配布して聴解問題を解かせた。

②ニュースなどの動画を視聴し，その後プリントまたは担当者の口頭による設問に答えさせた。

③関連の動画を視聴した。

【日本事情】（ミン）

使用教材：

自由教材（プリント，PPT）

到達目標：

①日本の地理，生活，文化，歴史，教育，経済，政治など，様々な事情について学ぶ。特に生活と文化の

面に重点を置いて学び，学んだことを直接経験することで生活に役立てる。

②これから留学生活を送る名古屋についてよく知り，より早く適応できるようにする。

③日本に関して自分で調べたこと，経験して学んだことをまとめて伝え，共有することができる。

授業の進め方：

①予習：本授業の学習効果を高めるために，前回授業の最後に次回のテーマに関する質問が書かれたワークシートを配り，宿題にした。

②授業：パワーポイントで写真や絵，図表などを見せながらわかりやすく説明し，予習を通して学生たちが調べたこと，知っていることについても随時質問した。講師の留学生活から分かったことや感じたことについて話し，韓国と日本の違いに焦点を当て，皆で一緒に考え，話し合った。

③見学：オリエンテーションのとき，学生たちに見学したいところについて質問し，一緒に話し合って見学する場所（学生達の引っ越しのために不動産，名古屋と日本の文化についてよりよく知るために熱田神宮，防災に備えるために名古屋市港防災センター）を決めた。

④発表：発表の時間は２回設け，１回は熱田神宮の見学の後，見学によって知ったことや感想をまとめて発表してもらった。もう１回は最後の授業のとき，これまで学んだことを基に，日本について自分が関心を持っていることについて調査して，紹介してもらった。

５．レポートの作成と発表会

最終の２週間は個人指導による修了レポート作成と口頭発表を行った。目的は，学部に入学後は，多くのレポートが課せられるため，一人で対応できるように，情報の収集，テーマの設定，アウトラインの作成，文章作成，レポートの完成，レジュメの作成までを体験することである。また，資料を日本語で読むことや資料の整理など，まだ難しいところも多いが，自分なりにコツをつかむようにすることである。

なお，修了レポートのタイトルは「日韓の情報教育の違い」「関西地域の電車」「日本人の恋愛についての考え方」「韓国と日本の食文化の比較」「機械翻訳」であった。

６．終わりに

冒頭にも述べたように，このコースは今年度が受け入れの最終年となった。2000年の１期から2019年の20期まで，本学で受け入れた学生は合計114名であった。ほとんどの学生が学部卒業後，本学をはじめ，日本国内外の大学院に進学している。また，すでに大学院を修了した学生は，日本と韓国の大手企業や大学などの研究機関で活躍しており，まさに両国の架け橋となっている。

昨今，日韓関係が予測不可能な状況にある中で，このような政府間の留学生や青少年の交流プログラムの充実は，両国の友好推進の潜在的な担い手として，非常に重要な役割を果たす存在であることは間違いないだろう。

オンライン日本語コースの運営

石　﨑　俊　子　・　佐　藤　弘　毅

名古屋大学国際機構国際言語センターでは，日本語を学びたいが学期中は研究や専門の勉強などで忙しく対面での授業に参加できない留学生向けに，Web 上で教材の提供･回答の採点･添削等を行う自律学習用のオンラインコースを用意している。中上級の学習者向けの読解・作文コースと初級から中級の学習者向けの漢字コースの２種類があり，CMS（Course Management System）である moodle を用いて行っている。

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。登録者数は履修登録を行った人の数を，受講者数は一度でもコースにアクセスした人の数を，修了者数は各コースの修了要件を満たした人の数である。

【オンライン読解・作文コース】

春学期	登録者数：21	秋学期	登録者数：59
	受講者数：６		受講者数：17
	修了者数：２		修了者数：10

2019年度オンライン読解･作文コースの修了者数（14課中10課以上60％以上の成績）は春学期２名，秋学期10名であった。

【オンライン漢字コース】

春学期	登録者数：30	秋学期	登録者数:112
	受講者数：５		受講者数：16
	修了者数：１		修了者数：３

2019年度オンライン漢字コースの修了者数（10課中80％以上の成績）は春学期１名，秋学期３名であった。

各期各コース共に履修登録者は年々増加しており，特に近年10月から新しく渡日する留学生の増加に伴い秋学期の登録者数が多くなっている。このことから，コースに対するニーズは年々増加していることが伺える。しかし，実際にコースに一度でもアクセスした人の数（受講者数）は，履修登録者数の15% 程度と低い割合であった。また，最後までコースを続けて修了要件を満たした人は，秋学期の読解・作文コースは例年より多かったものの，その他は受講者数の20% 程度と非常に少ない。この傾向もここ数年続いている。

多くの受講者は，研究などの活動を続けながら各自のペースで日本語を勉強するためにオンラインコースに登録したものの，実際には忙しくてなかなかコースにアクセスする時間が取れないものと推察される。しかし，たとえ最後までコースを続けられなくとも，受講者が自分のペースでいつでも学習できる環境が用意されていることには意味があると考えている。また今年度１月より流行が始まった新型コロナウイルス感染症の影響で対面での授業が困難となっている状況を考えると，今後はこのようなオンラインでの学習機会が非常に重要になってくると思われる。

今後も受講者のニーズを伺いながら，引き続き利用しやすいオンラインコースの運営を続けていきたいと考えている。

名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2019年度実施報告

許　　明　子

１．はじめに

本学における２週間の短期日本語プログラム（以下，NUSTEP）は本学と協定を締結している海外の大学に在学している学生を対象に，本学の研究および教育について体験してもらい，将来の日本への留学のきっかけとなることを目的として，年に２回実施されている。2018年度10月から国際言語センターが中心となって本プログラムの運営を行うことになったが，国際教育交流センターの各部門の先生方と協力しながら国際機構の日本語研修プログラムとして実施している。

2019年度は７月と２月に２回実施される予定だったが，2020年春季プログラムは新型コロナ感染症の影響による実施が中止された。本実践報告では2019年７月12日（木）から７月25日（木）に実施された夏季プログラムについて報告する。

２．プログラム概要

これまでに実施された５回のNUSTEPの実績に基づいて，春季プログラムも同様な内容でプログラムの運営を行った。プログラムの概要は以下の表１の通りである。

本プログラムの内容は，日本語の研修や日本の文化を体験するだけではなく，名古屋大学の研究活動を体験できるように設計されている。名古屋大学でのプチ留学体験をすることによって，将来に正規の留学生して留学するきっかけにすることが目的である。東海地方を中心とする日本文化や社会を体験しながら，名古屋大学のラボ見学および専門講義（文系，理系）を受

＜表１＞　春季プログラムのスケジュールと内容

	７月11日	７月12日	７月13日	７月14日	７月15日	７月16日	７月17日
午前	入居	開講式	エクスカーション（フィールド・トリップ）	自由行動	日本語１	日本語３	日本語５
		オリエンテーション，歓迎会			日本語２	日本語４	日本語６
午後		クラス分けテスト			日本研究Ⅰ（有松絞り体験）	専門講義（ラボ見学）	日本研究Ⅱ（トヨタ産業技術記念館）
		キャパスツアー				名大生との交流（学内サークル：混声合唱団コール・グランツェと交流）	

	７月18日	７月19日	７月20日	７月21日	７月22日	７月23日	７月24日
午前	日本語７	日本語９	ホームビジット	自由行動	日本語11	日本語13	日本語15
	日本語８	日本語10			日本語12	日本語14	日本語16
午後	日本研究Ⅲ（着物の着付け体験）	日本研究Ⅳ（名大生との交流）			専門講義（文系／理系の専門講義）	自主学習	研修成果発表会，修了式・歓送会

ける等，日本文化体験と名古屋大学のアカデミック・ライフの体験ができることが本プログラムの最も大きな特徴である。

(1) 日本語

日本語の授業はクラスのメンバーとボランティアとして授業に参加した日本人学生がグループになり，議論や意見交換を行うワークショップ中心の授業を行った。ボランティアで参加した日本人学生や参加者同士がディスカッションを行うことによって，日本研究Ⅰ～Ⅳへのアウトプットにつなげていくような形で授業を進めた。

日本語の授業内容の概要は以下の表２の通りである。

＜表２＞　日本語の授業内容

回	授業日	学習内容
1	７月15日（月）	聴解：名古屋や中部地域
2		聴解：日本研究Ⅰ「名古屋の食文化」／メモの取り方（報告準備）
3	７月16日（火）	読解：日本事情（社会・文化・人）トピックディスカッション
4		総合：発表準備
5	７月17日（水）	聴解・会話：「日本のモノづくり・人作り」「日本の文化」読んで話す
6		発表：日本研究Ⅲ　トヨタ産業技術記念館見学　情報の取り方
7	７月18日（木）	会話：トヨタ産業技術館見学報告会
8		総合：日本研究Ⅱ　伝統と文化報告
9	７月19日（金）	発表：研究成果報告準備／インタビューの仕方
10		総合：日本研究Ⅳ 現代社会と若者
11	７月22日（月）	発表：インタビュー報告，グループワーク
12		総合：研究成果発表会準備　ポスターアウトライン／原稿作成
13	７月23日（火）	読解：日本の手紙文化，研究成果発表の準備
14		総合：暑中見舞いを書く，ポスター作成，発表準備
15	７月24日（水）	最終発表（ポスター発表）
16		

(2) 日本研究と文化体験

日本研究Ⅰ：愛知県の伝統産業（有松絞り体験）
日本研究Ⅱ：日本の伝統と文化（着物の着付体験）
日本研究Ⅲ：愛知県の産業（トヨタ産業技術記念館の見学）
日本研究Ⅳ：現代の社会と日本の若者（日本語によるインタビュー）

上記の日本研究Ⅰ～Ⅳは日本語の授業とエクスカーションや着物の着付等の体験を関連付けて体験的に学ぶことができる。日本研究Ⅰはエクスカーションとして有松絞りを体験し，愛知県の伝統産業と文化を学び，日本研究Ⅱは着物の着付体験を通して日本人の生活や習慣について学んだ。日本研究Ⅲはトヨタ産業技術記念館を見学し愛知県の産業を代表する自動車産業に学び，日本研究Ⅳは名大生を中心とした日本の若者を対象に，インタビューを行ったりゲームをしたりする等の国際交流を行った。

その他に，名古屋大学のよさこいサークルの混声合唱サークルコール・グランツェの学生との交流や，日本人ノ家庭を訪問し交流するホームビジット（オプション）等，日本人の生活について理解を深めるための内容も含まれている。

３．参加者

春季プログラムには29名が参加した。各大学からの参加者は以下の表３の通りである。

＜表３＞　春季プログラムの参加者

韓国木浦大学（３名）
国立台湾大学（２名）
国立清華大学（２名）
同済大学（２名）
ソウル国立大学（２名）

香港大学（３名）
華中科技大学（２名）
東北大学（３名）
ハルピン工業大学（２名）
モンゴル国立大学（１名）
南京大学（１名）
吉林大学（３名）
大連理工大学（３名）

14校の協定大学からプログラムに参加を希望した申請者は合計52名だったが, NUSTEP 運営委員会での選考を通して29名を受け入れた。本プログラムに実施を希望する学生が多いだけではなく，韓国，中国，モンゴルの協定大学からも参加しており，本プログラムの認知度が益々高くなっていることを実感することができた。

４．2020年春季プログラムの中止について

2020年２月６日～20日に実施予定だった春季プログラムはは新型コロナウイルス感染症の影響により中止を余儀なくされた。29名のプログラム参加者の選考が終わり，受け入れの準備が整っていたが，プログラム開始直前である2020年１月中旬にプログラム実施の中止が決定され，協定大学の窓口を通して通知を行った。

プログラムに参加予定だった学生たちからは大変残念に思っているという連絡をたくさん受け取っており，非常に申し訳ない気持ちでいっぱいである。本研修プログラムは２週間の短期滞在であり，体験型の研修プログラムであることから，新型コロナウイルス感染症の影響は非常に大きい。今後の感染症の状況を見極めつつ，体験型の研修プログラムとして新しいコンテンツの開発が必要である。

５．NUSTEP 運営委員会

本プログラムは国際機構の国際化を担う特別プログラムとして位置づけられており，国際言語センターおよび国際教育交流センターの両センターの関係者が協力してプログラムを運営している。NUSTEP 運営委員会を通して参加者の選考を行い，両センターの教員が分担してプログラムの内容を担当している。

以下, NUSTEP の運営委員および担当内容を紹介する。

許　明子　（国際言語センター，NUSTEP 運営委員会委員長）：プログラムコーディネーター

石﨑俊子　（国際言語センター）：日本語クラス分けテスト，授業補助

谷口紀仁　（国際教育交流センター教育交流部門）：オリエンテーションの準備および実施，開講式・歓迎会・歓送会の実施，専門講義

巽　洋子　（国際教育交流センター海外留学部門）：学生ボランティアの募集

田中京子　（国際教育交流センター，アドバイジング部門）：着物講座，ホームビジット

Matthew Linley（国際教育交流センター国際プログラム部門）：プログラムの評価アンケート調調査および集計

６．おわりに

本研修プログラムは2016年度春季プログラムから開始され，今回で７回目の実施となった。過去のプログラム運営の実績を踏まえて今期のプログラムを運営したが，プログラムに参加した学生からは満足度が高く，活動内容について全体的に非常に高い評価が得られた。本プログラムの特徴である日本の文化および，名古屋大学の高いレベルの研究活動が同時に体験できる日本語の研修という点で，高く評価されたと思われる。海外の協定校に在学している学生にとっては今後の日本研究，日本への留学につながる貴重な研修になっていることは間違いないだろう。

しかし，新型コロナウイルス感染症の影響により2020年春季プログラムの実施が中止となり，2020年春季プログラムも中止が決定している。ウィズコロナ，ポストコロナの時代における短期研修プログラムの在り方を検討しなければならない時代であると考える。NUSTEP の実績を踏まえてオンラインによる体験型研修プログラムの実施に向けて新しいコンテンツの開発などを模索しなければならない。

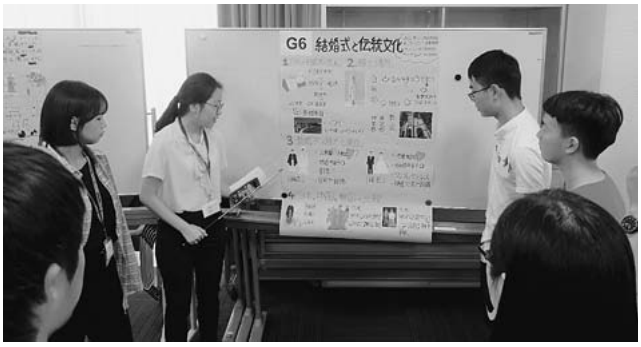
【資料】2019年度夏季プログラムの様子

【写真１】修了式（2019年７月24日）

【写真２】日本語の授業

【写真３】着物着付け体験

【写真４～６】研究成果発表会



資　　料

歴代センター長

令和元年　国際言語センターの専任教員

令和元年　日本語コースの担当者

令和元年　大学院・学部授業担当および学位審査論文

国際言語センター教員研究業績

国際言語センター全学委員会委員

国際言語センター沿革

歴代国際言語センター長

留学生センター

初代	馬越　徹	1993年４月～1995年３月
第二代	石田　眞	1995年４月～1999年３月
第三代	塚越　規弘	1999年４月～2001年３月
第四代	末松　良一	2001年４月～2005年３月
第五代	江崎　光男	2005年４月～2007年３月
第六代	石田　幸男	2007年４月～2011年３月
第七代	町田　健	2011年４月～2013年９月

国際言語センター

初代	福田　眞人	2013年10月～2017年３月
第二代	大室　剛志	2017年４月～2019年３月
第三代	木下　徹	2019年４月～

令和元年　国際言語センター専任教員

センター長　　木下　徹（2019年４月～）

日本語・日本文化教育部門

教　授	浮葉　正親
教　授	許　明子
准教授	石﨑　俊子
准教授	李　澤熊
准教授	佐藤　弘毅
准教授	俵山　雄司
准教授	永澤　済

令和元年度　日本語コースの担当者

※（主）は、各コースのコーディネーター（主担当）

１．日本語研修　コース

〈前期：第80期〉

佐藤　弘毅（主）　高橋　伸子
大羽かおり　松木　玲子
内山喜代成　安井　澄江
久野伊津子

〈後期：第81期〉

佐藤　弘毅（主）　高橋　伸子
大羽かおり　松木　玲子
内山喜代成　安井　澄江
久野伊津子

２．日本語・日本文化研修コース

〈2018年10月～2019年９月：第38期〉

永澤　　済（主）　中川　康子
浮葉　正親　西田　瑞生
石川　公子　松岡みゆき
栗木　久美

３．教養科目「留学生と日本
―異文化を通しての日本理解」

〈後期〉

浮葉　正親（主）　和田　尚子
髙木ひとみ

４．全学向け日本語コース

〈前期〉

俵山　雄司（主）　宗林　由佳
李　　澤熊　高橋　伸子
石﨑　俊子　高安　葉子
浮葉　正親　滝　　理江
佐藤　弘毅　嶽　　逸子
池田菜採子　田中　典子
呉　　禧受　西田　瑞生
大羽かおり　服部　　淳
香川由紀子　馬場　典子
加藤　　淳　松木　玲子
久野伊津子　安井　澄江

〈後期〉

俵山　雄司（主）　高橋　伸子
李　　澤熊　高安　葉子
石﨑　俊子　滝　　理江
浮葉　正親　嶽　　逸子
佐藤　弘毅　田中　典子
池田菜採子　西田　瑞生
呉　　禧受　服部　　淳
大羽かおり　藤森　秀美
香川由紀子　松岡みゆき
加藤　　淳　松木　玲子
久野伊津子　安井　澄江
宗林　由佳

５．NUPACE 日本語コース

〈前期〉

石﨑　俊子（主）	高安　葉子
許　　明子	滝　　理江
池田菜採子	嶽　　逸子
石川　公子	田中　典子
呉　　禧受	中川　康子
大羽かおり	服部　　淳
香川由紀子	馬場　典子
久野伊津子	藤森　秀美
宗林　由佳	松木　玲子
高橋　伸子	安井　澄江

〈後期〉

石﨑　俊子（主）	高橋　伸子
佐藤　弘毅	高安　葉子
許　　明子	滝　　理江
池田菜採子	嶽　　逸子
石川　公子	田中　典子
内山喜代成	中川　康子
呉　　禧受	服部　　淳
大羽かおり	馬場　典子
香川由紀子	藤森　秀美
久野伊津子	松木　玲子
宗林　由佳	安井　澄江

６．学部留学生を対象とする言語文化科目〈日本語〉

〈前期〉

浮葉　正親（主）	西田　瑞生
永澤　　済	藤森　秀美
鷲見　幸美	

〈後期〉

浮葉　正親（主）	西田　瑞生
永澤　　済	藤森　秀美
鷲見　幸美	馬場　典子

７．日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2019年10月～2020年３月〉

李　　澤熊（主）	立見　洸貴
俵山　雄司	関　　ソラ
柴田　龍希	村田　竜樹

８．名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）

許　　明子（主）	梶原　彩子
入江　友里	加藤　　淳
内山喜代成	宗林　由佳
呉　　禧受	田中　典子
香川由紀子	西田　瑞生

平成31年・令和元年度　授業担当および学位論文審査

Ⅰ．授業担当（大学院・教養教育院・NUPACE）

１．大学院

人文学研究科（国際言語文化研究科の担当科目名は省略）

許　明子：現代日本語学研究ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語意味論特殊研究ａ
（春学期１コマ　２単位）
現代日本語学研究ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
日本語意味論特殊研究ｂ
（秋学期１コマ　２単位）

李　澤熊：日本語意味論総合演習ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語意味論総合演習ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
日本語文法論Ⅰ　（春学期１コマ　２単位）
テキスト学Ⅰ　（秋学期１コマ　２単位）

永　澤斉：日本語語彙論特殊研究ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語語彙論特殊研究ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
日本語文法論Ⅱ　（秋学期１コマ　２単位）

俵山雄司：日本語談話分析総合演習ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語談話分析総合演習ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅱ
（春学期１コマ　２単位）
比較社会文化論
（春学期１コマ　２単位，オムニバス２コマ担当）

石﨑俊子：日本語教材開発総合演習ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語教材開発総合演習ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅲ
（秋学期１コマ　２単位）

佐藤弘毅：日本語教育工学特論ａ
（春学期１コマ　２単位）
日本語教育工学特論ｂ
（秋学期１コマ　２単位）
応用日本語学研究Ⅳ
（秋学期１コマ　２単位）

浮葉正親：日本事情論　（春学期１コマ　２単位）
日本言語文化論　（秋学期１コマ　２単位）

２．教養教育院

浮葉正親：基礎セミナーＡ「韓流ドラマから『パッチギ』まで―日韓比較文化論のすすめ」
（春学期１コマ　２単位）

浮葉正親・髙木ひとみ・和田尚子
：全学教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解」（秋学期１コマ　２単位）

佐藤弘毅：理系基礎科目（文系）「情報リテラシー（文系）」　（春学期１コマ　２単位）

永澤　済：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（春学期１コマ　1.5単位）

永澤　済：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語２」
（秋学期１コマ　1.5単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（春学期１コマ　1.5単位）

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（秋学期１コマ　1.5単位）

永澤　済：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語１」
（春学期１コマ　２単位）

永澤　済：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語２」
（秋学期１コマ　２単位）

３．名古屋大学短期交換留学プログラム（NUPACE）

許　明子：入門講義「日本語コミュニケーション論１」
（秋学期１コマ　２単位）
許　明子：入門講義「日本語コミュニケーション論２」
（春学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論１」
（秋学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論２」
（春学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学１」
（秋学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学２」
（春学期１コマ　２単位）
香川由紀子：入門講義「日本文学１」
（秋学期１コマ　２単位）
香川由紀子：入門講義「日本文学２」
（春学期１コマ　２単位）

Ⅱ．学位（博士）論文審査

○李　澤熊（主査）
論文提出者：滝理江（国際言語文化研究科）
提 出 論 文：例示の機能をもつ助詞の意味分析―認知言語学におけるカテゴリーの観点から―

○永澤　済（副査）
論文提出者：滝理江（国際言語文化研究科）
提 出 論 文：例示の機能をもつ助詞の意味分析―認知言語学におけるカテゴリーの観点から―

国際言語センター教員研究業績

李　澤熊

著書

１）李澤熊（2019.11）『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』プラシャント・パルデシ・籾山洋介・砂川有里子・今井新悟・今村泰也（編），開拓社.

論文

１）李澤熊（2019.5）「「決める」と「定める」の意味分析―韓国語動詞정하다（jeonghada）と比較して―」，『日本認知言語学会論文集』第19巻，537－542，日本認知言語学会.【CD-ROM 版】

２）李澤熊（2020.3）「動詞「あつまる」の意味分析―日本語教育の観点から―」，『名古屋大学人文学研究論集』第３号，207－219，名古屋大学大学院人文学研究科.

３）李澤熊（2020.3）「動詞「のばす」の多義構造―日本語教育の観点から―」，『名古屋大学日本語・日本文化論集』第27号，１－29，名古屋大学国際言語センター.

その他

１）李澤熊（2019.11）「ころす」『基本動詞ハンドブック』，「国立国語研究所・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）.

２）李澤熊（2020.2）「集める」『基本動詞ハンドブック』，「国立国語研究所・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）.

３）李澤熊（2020.2）「集まる」『基本動詞ハンドブック』，「国立国語研究所・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）.

石﨑俊子

著書

１）石﨑俊子（2019）「反転授業を意識した教材開発のための実践授業」當作靖彦（監修），李在鎬（編）『ICT ×日本語教育』ひつじ書房，pp.100－111

研究報告

１）石﨑俊子・許明子・俵山雄司（2020年３月）「名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の日本語教育に対するニーズ調査―2019年11月・12月の調査において」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第27号，pp.85－104

研究発表

１）石﨑俊子（2019年９月）「THE BIG TREE 日本語でビジネス・トーク」第22回英国日本語教育学会年次大会，2019年９月５日，Newcastle University

その他

１）石﨑俊子（2019年10月）「国際言語センター開発の教材紹介」，令和元年度文化庁日本語教育大会京都大会，2019年10月13日，京都大学

浮葉正親

論文

１）浮葉正親（2019）「盆・中元節・百中の比較民俗学的考察」，『第13回新羅学国際学術大会「新羅の民俗」』新羅文化遺産研究院（韓国・慶州市），57－77頁

研究発表

１）浮葉正親（2019）「盆・中元節・百中の比較民俗学的考察」，第13回新羅学国際学術大会「新羅の民俗」，2019年９月20日，韓国・慶州市国際会議場

２）浮葉正親（2019）「社会参加としての在日朝鮮人文学―磯貝治良の文学活動を中心に」，第７回東アジアと同時代日本語文学フォーラム，2019年10月26日，台湾・東呉大学

佐藤弘毅

研究発表

１）佐藤弘毅（2020）「電子黒板を用いた授業において「教師が見える」ことによる効果に関する因果関

係の検討」『教育システム情報学会研究報告」第34巻第６号，pp.215－222

俵山雄司

論文

１）俵山雄司・望月雄介（2020）「語りの談話に出現する名詞における不確実性―中国人日本語学習者と日本語母語話者の比較―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第27号，pp.31－48.

その他

１）名古屋市内の日本語学習支援ニーズ調査分析報告書（http://tnnjp.com/probono/report19.pdf）※ 分析ワーキンググループのメンバーとして分析・執筆を担当

永澤　済

著書

１）永澤済（2019）「生物の和名・俗名における意味拡張」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』くろしお出版，pp.93－114.

２）永澤済（2020）「日本言語学史上の言文一致―司法界における思想・実践との比較―」長田俊樹（編）『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂，pp.177－204.

研究発表

１）永澤済「コーパスからみる和化漢文と現代語の接点：「ために（為）」の行為者用法の変遷」「昭和・平成書き言葉コーパス」科研研究会，2019年10月，於国立国語研究所.

許　明子

論文

１）許明子（2019年９月）「接触場面の意見述べの会話に見られる韓国人日本語学習者の発話内容について―パーソナル・テリトリーとFTA行為に着目して―」『言語の研究』pp.167－178，花書院

２）許明子（2019年９月）「日韓初対面同士の会話に見られる指示詞の使用について―直示性とテリトリーの捉え方を中心に―」『第40回国際学術発表大会論文集』pp.141－147，韓国日本語学会

３）許明子・肖宇彤（2020年３月）「外国人日本語学習者の意見表明における合意形成について―初対面の日本語母語話者との意見述べの会話を通して」『社会言語科学会第44回大会発表論文集』pp.158－161，社会言語科学会

４）許明子（2020年３月）「自己表現活動を取り入れた学習指導の有効性について―初級後半レベルにおける授受表現及び受身表現のエッセイの分析を通して」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第27号，pp.69－84

研究報告

１）石﨑俊子・許明子・俵山雄司（2020年３月）「名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の日本語教育に対するニーズ調査―2019年11月・12月の調査において」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第27号，pp.85－104

研究発表

１）許明子（2019年９月）「日韓初対面同士の会話に見られる指示詞の使用について」韓国日本語学会，2019年９月21日，於聖潔大学校

２）許明子・肖宇彤（2020年３月）「外国人日本語学習者の意見表明における合意形成についてー初対面の日本語母語話者との意見述べの会話を通して」第44回社会言語科学会，2020年３月５日～７日（開催中止），於同志社大学

科学研究費助成事業

研究種目名：基盤研究（C）（一般）

課 題 番 号：19K00707

研究課題名：日韓中の接触場面における対人関係構築とコミュニケーションスタイルに関する対照研究

補助事業期間：平成31年度（令和元年）～令和５年度

国際言語センター全学委員会委員

平成31年度（令和元年）　国際機構全学委員会委員　（2019年4月～）

委　員　会　名	国際言語センター	任期	期　　間
国際機構会議	センター長		５号委員
国際戦略分科会 （旧　国際交流委員会）	センター長		３号委員
国際教育運営委員会	許　明子		４号委員
国際教育交流実施委員会	石﨑　俊子 許　明子		５号委員 ５号委員
全学教育企画委員会	浮葉　正親	２年	2018年４月１日～2020年３月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	佐藤　弘毅	２年	2018年４月１日～2020年３月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤　弘毅		
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉　正親		
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会　全学教育棟子局運営委員会	佐藤　弘毅		
全学同窓会幹事会	李　澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石﨑　俊子	２年	2018年４月１日～2020年３月31日

平成31年度（令和元年）　国際機構　国際言語センター内部委員会委員　（2019年4月～）

委員会名	部会・WG	国際言語センター	備考
総務委員会	特昇 WG	浮葉・許	
財務・施設委員会	経理・整備 WG	許・李	
	情報セキュリティ WG	佐藤・石﨑	
	安全・防災部会	許・永澤・石﨑	
教務委員会		俵山・石﨑	
広報委員会	広報・紀要部会	佐藤・李・俵山	国際言語センターの年報の編集委員
	ホームページ部会	石﨑・佐藤	
	FD 委員会	俵山・石﨑	
	日本語・日本文化論集編集部会	永澤・浮葉・許	

国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任,「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され，総合言語センター発足 総合言語センターの１部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として,「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の２部門体制)	
	留学生センターとして，これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ,（1994.2),研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによる WebCMJ のオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア･システム開発部門」発足（留学生センター４部門体制となる）
8		担当助教授着任（ハリソン）
2000. 4		二人目の担当助教授着任（大野）
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授１名退任（藤原）	
4	講師１名採用（李）	
2004. 2		助教授１名転任（ハリソン）
3	助教授１名退任（神田）	
4		WebCMJ 多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授１名採用（石﨑）
2005. 3		助教授１名転任（大野）

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
2005. 4	日本語プログラムの再編成 １）全学日本語プログラム（集中コース，標準コース，漢字コース，入門講義，オンライン日本語コース） ２）特別日本語プログラム（初級日本語特別プログラム，上級日本語特別プログラム，学部留学生向け日本語授業，日韓理工系学部留学生プログラム）	教授１名日本語・日本文化教育部門から配置換え（村上） オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師１名採用（佐藤）	
2006. 3	教授１名転任（尾崎）	
4	助教授１名採用（衣川）	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授１名昇任（籾山）	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授１名昇任（李）	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授１名着任（初鹿野：国際交流協推進本部）	
2010. 2	特任准教授１名着任（徳弘：国際交流協推進本部）	
2011. 3		TNe とよた日本語 e ラーニング会話編（市役所，病院，学校）完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編（ひらがな，カタカナ，履歴書）完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成（17言語） 「名古屋大学日本語コース中級Ⅰ＆Ⅱ」オンライン及びデジタル版の開発 TNeとよた日本語eラーニング会話編５カ国版完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編５カ国版完成
2013. 4	教授２名昇任（浮葉，衣川）	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い，留学生センター日本語・日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は，「国際言語センター」に改組（「日本語・日本文化教育部門」・「英語教育部門」の２部門体制）。	
2014. 4	准教授１名昇任（佐藤）	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授１名定年退職（村上）	
4	准教授１名採用（俵山）	
2016. 2	G30日本語教育担当教員２名「国際教育交流センター」へ配置換え	
3	教授１名定年退職（鹿島）	
4	講師１名採用（永澤）	
2018. 1	准教授１名昇任（永澤）	
3	教授１名転任（籾山）	

	日本語・日本文化教育部門
2018.10	教授１名着任（許）
2019. 3	教授１名転任（衣川）

編集後記

国際言語センター年報は，今回で第７号を刊行することとなった。各教員の活動報告に加えて，実践報告３編が掲載されている。本学の国際化戦略に伴い，日本語教育へのニーズはさらに多様化するものと予想される中，こういった実践報告の積み重ねは，日本語教育の質の向上や改善につながっていくと考えられる。

近年，教授会や各種委員会等の校務負担の増加により，大学教員の研究時間の確保が年々難しくなってきている。しかし，昨今の大学を取り巻く環境を鑑みると仕方のないことかもしれない。このような厳しい状況の中ではあるが，今後もしっかり研究活動に取り組んでいきたいと思うところである。 (LT)

名古屋大学国際機構
国際言語センター年報　第７号

2021年３月１日　印刷・発行

〒464－8601　名古屋市千種区不老町
編集者　名古屋大学国際機構
　　国際言語センター
電 話 〈052〉７８９－２１９８
FAX　　７８９－５１００
印刷所　株式会社　荒 川 印 刷
　　名古屋市中区千代田２－16－38
　　電話〈052〉２６２－１００６